

ル時ハ其書類ヲ自
己ノ手元ヘ留置ノ
權アリ

○〔第四百十六條〕
法律ハ被告ノ事ガ
ラ模様等ニテ罪ア
リトオシ測リ定ム
ル事ナシ

○〔徵憑〕證據トナ
ルヘキ廉々

一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルコ
非ヤレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ
授受スルヲ許サス
食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監
倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム
第四百十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但
十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヲ得
言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可
シ
豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ
通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節 證據

第四百十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模様ニ因リ
有罪ナルノ推測ヲ定ムルヲナシ

○〔第四百十七條〕
證據トハ直接ニ罪

ノ有無ヲ証スル者
ヲ云フ証人ニ於テ
被告人ノ犯罪ヲ目
撃シタリト陳述ス
ルノ類徵憑ハ稍々
薄シ犯所ニ存スル
足跡被告人ノ足跡
ト符合スルノ類

○〔第四百十八條〕
臨檢家宅搜索物件
家ヘ往テ調べ種々

被告人ノ白狀官吏ノ檢証調書證據物件証人ノ陳述
鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任
ス

第四百十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人
ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要
ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ
被告人証人ノ訊問ヲ爲スコハ書記ノ立會ヲ必要ト
ス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可
シ
裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハ
サル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告
人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハ
シム可シ

ノ物ヲサガシ、ラ
ブル

○〔第百五十條〕恐

嚇トハ白狀セサル

ニ於テハ拷問スベ

シト云ヒ被告人ヲ

恐怖セシムルノ類

詐言ヲ用ユルトハ

共犯捕ニ就キ盡ク

白狀シタリト詐ハ

リ稱スルノ類

○〔第百五十一條

陳述書〕被告人ノ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ
讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ
書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其効ナカ
ル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第百四十九條

豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ
但檢証ヲ爲シ又ハ証人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要
スル時ハ此限ニ在ラス

第百五十條

豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セ
シムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラズ

第百五十一條

書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取人被告人
ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ
署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル

申シ立タルコトヲ
書キ記シタル物

時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヲ記載シ豫審判事
ト共ニ署名捺印ス可シ

△參看○明治十年十二月司法省丙第十六号達

治罪法中犯人証人等押印ノ條々實印無之者ニ限り從
來ノ慣例ニ依リ摺印爲致候儀ト心得可シ此旨相違候
事

第百五十二條

被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キ
ヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從

ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印
ス可シ

第百五十三條

被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヲ得

第百五十四條

豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヲ人違

○〔第一百五十四條 事實ヲ發見〕犯罪ノ事實ヲ見出ス

○〔對質〕引キ合セテ取リダマス

○〔第一百五十六條 通事ヲ命ス〕聾啞ニ通事タル者ハ別ニ有ル者ニ非ズ故ニ平生其聾啞ニ近シキ居テ手眞似ヲ以テ用テ辨セシ者ヲ用ユ

ナキト其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ証スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人証人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヲ得
第一百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ
第一百五十一條 第一百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス
第一百五十六條 被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者通字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ
被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ
第一百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

○〔第一百五十八條〕

犯所ニ臨ミ檢証ヲ爲ストハ其場所ノ景狀ヲ檢視シ其罪ヲ犯スノ方法ハ如何ナリシヤ犯人ハ如何ナリシヤ犯人ハ如何シテ逃亡セシヤヲ逐一取リ調べ其證據ヲ取集ムルヲ云フ

○〔第一百五十九條 犯罪ノ性質方法〕

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ
第九十二條 第九十三條 第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス
第五節 檢証及ヒ物件差押
參看○明治十四年十二月司法省丙第十五號達
治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢証及ヒ物件差押ノ事件ニ付キ急速ヲ要スル場合ニ巡查ヲ同行シ又ハ所在ノ巡查ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ可達置此旨相達候事
第一百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢証ヲ爲ス可シ
又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

犯シタル罪ノアリ
サマテダテ

○〔第六十一條
周圍ヲ閉鎖〕人ノ
入ラサル様ニカコ
ヒナスル

○〔第六十二條
臨檢〕入ツテシラ
ハル

○〔第六十三條〕
拘留ヲ受クル被告
人ハ臨檢等ノ處分
ニ立會フヲ許サ

第五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所
及ヒ被告人ノ人違ナキヲ證明ス可キ模様ニ付キ
調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ
第六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタ
ル物件其出所及ヒ模様ニ因リ被告人ノ人違ナキヲ
又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時
ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物
件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ
付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖
シ又ハ看守者ヲ置クヲ得

第六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ
證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨

ス若シ之ヲ許ス時
ハ逃亡ノ恐レアレ
バナリ

檢スルヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時
ハ同居ノ親屬若シ其在ラザル時ハ戸長ノ立會アル
ヲ要ス

第六十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用
ス

第六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會
ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ得

若シ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得
ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此
限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立
會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遅延
ス可カラズ

○〔第六十五條〕
 辨解ヲ爲サシム
 其物品ノイキ立チ
 云ハシム

○差押ヘタル物件
 ハ何レモ犯罪ニ關
 係アリテ證據トナ
 ルベキ物ナリ故ニ
 之ヲ被告人ニ示シ
 辨解ナサシム其當
 否如何ニヨリテ罪
 ノ有無ヲ推知スル
 コヲ得ルヲ以テナ

第六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第
 百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ
 物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡
 ス可シ

第六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ
 立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ
 辨解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ証人ノ
 陳述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ
 依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第六十七條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分
 中何人ニ限ラズ允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スル

リ

○〔第六十七條〕
 逐斥〕オヒハラフ

○〔第六十八條〕
 豫審判事ノ管轄地
 内ト雖モ判事自ラ
 臨檢家宅搜索ヲ爲
 スコトヲ必要トス事
 件重大ナラス且其
 處分ヲ爲スヘキ場
 所遠隔ナル時ハ治
 安判事ニ囑託スル
 コヲ許ス

コヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ
 終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得

第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ
 因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託ス
 ルコトヲ得

▲參看○明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ
 囑託スルコトヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警
 察官ニモ囑託スルコトヲ得

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリ
 トスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ
 通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若シ
 ハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受

○〔証人訊問〕罪ノ有無ヲ証スル人ヲ吟味スル

○〔第七十條〕檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ証人トシテ指名シタル者夥多ナル時ハ一時ニ皆之ヲ呼出シ訊問スルコトヲ得ス故ニ事件ノ輕重ニ從カヒ原被ノ証人五名ツ、又八十名ツ、

取開披スルコトヲ得但受取証書ヲ渡ス可シ
前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節 証人訊問

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ証人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ
原告証人被告証人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラズ
又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ証人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得

▲參看○明治十四年九月廿日第四十五號布告

ヲ先ツ呼ビ出シ其訊問ヲ爲シタル後千餘ノ証人ヲ呼出スベシ

○証人ト爲ルベキ者ハ特ニ犯罪ヲ目撃シ又ハ聞知シタル者ニ限ラズ犯罪前後ノ模様ヲ知リ又ハ被告人ノ素ヨリノ行ナヒヲ知ル

豫審又ハ公判ニ付証人ヲ呼出サント請フ者アルキハ裁判所ニ於テ其旅費日當等ノ金額ヲ算定シテ之レヲ豫納セシムヘシ

若シ被告人旅費日當ヲ豫納スルノ資力ナキトキハ治罪法第七十條ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置ヘシ

第七十一條 証人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ証人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ証人裁判所所在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

者ハ皆証人トシテ
訊問スヘシ若シ然
ラハ大ニ事實ヲ得
ル事アルベシ

○〔第七十三條〕
呼出狀ノ送達ト出
廷トノ間「サシガ
ミ」ヲ得テ裁判所へ
出ル時間

若シ証人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判
事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得
本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ
名ヲ以テ其ノ裁判所ノ書記局ヨリ之レヲ送達ス可
シ

▲參看○明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ
屬託スルコトヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警
察官ニモ屬託スルコトヲ得

第七十三條 呼出狀ニハ証人ノ氏名住所及ヒ職業
ヲ記載ス可シ
又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ
言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ
呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クとも二十四時ノ猶

豫アル可シ

○〔第七十四條〕
証人病氣又ハ公務
其他然ル可キ事故
ニテ出廷スル事ナ
ラザル時ハ豫審判
事証人ノ居ル處ニ
至テ調アル

○〔經由〕手ヲヘル
○〔第七十七條〕
証人初度又ハ再度
ノ呼出狀ノ送達ヲ
受ケザルカソノ呼
出狀ニ出廷ノ日時

第七十四條 証人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ
呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ豫審判
事其所在ニ就テ之ヲ訊問スヘシ
第七十五條 証人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人
軍屬ナル時ハ其所属長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達
ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キコトヲ認可シ又ハ
職務上已ムコトヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シ
テ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ
第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ
場合ヲ除クノ外証人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意
見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但
其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス
豫審判事ハ其証人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度

等ヲ記載セザルカ
 又ハ急病ニ罹リ豫
 メ出廷セザルノ届
 書ヲ差出スヲ得
 ザル時ハ毫モ其身
 ニ過失アラザルナ
 リ故ニ第七十六
 條ノ罰金ノ言渡シ
 ヲ取消スベシ

○〔第八十條愛
 憎畏懼ノ心ナク云
 々〕一己ノ私ヲ以
 テオノレニヨキ者

ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾留狀ヲ發スルヲ得
 得但其費用ハ証人ナシテ之ヲ擔當セシム
 若シ証人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ
 言渡シ且勾引狀ヲ發スルヲアル可シ

第七十七條 豫審判事ハ証人初度又ハ再度ノ呼出
 狀ヲ受ケサルヲ其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背
 キタルヲ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷ス
 ル能ハサリシヲ証明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽
 キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第七十八條 証人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其
 呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時
 ハ其人違ナキヲ証明ス可シ

第七十九條 豫審判事ハ証人トシテ呼出シタル者
 ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第八十一條ニ記

ノ爲ニハ罪トナル
 可キコトヲ輕ク云
 ヒ已レニアシキ者
 ニハ重ク云ヒ又ハ
 目上ノ人タルヲ恐
 レテ罪ヲカクス事
 等ナキヲ誓ハシム

○〔第八十一條〕
 本條ニ記載シタル
 者ハ何レモ其陳述
 スル所正實ナラサ
 ルノ嫌疑アリ故ニ
 証人ト爲リ宣誓シ

載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第八十條 豫審判事ハ証人ナシテ愛憎畏懼ノ心ナ
 シ正實ニ陳述ヲ爲ス可キヲ宣誓セシム可シ
 豫審判事ハ証人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印
 セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附
 記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ証人ト爲ルヲ得
 許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヲ得

- 一 民事原告人
- 二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬
- 三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ
 後見ヲ受タル者
- 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

テ陳述ヲ爲スヲ許サズ惟參考ノ爲メニ聽クヲ得ルノミ

○〔第八十二條 公權云々〕刑法ニ詳カナリ就テ見ルヘシ

○〔現ニ陳述云々〕現在申シ述ヘ可キ事ガラコテ訴ヘテ受ケシコ其ノ申シ述ノ證據トナル事

第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一十六歳未満ノ幼者

二知覺精神ノ不充分ナル者

三瘖啞者

四公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ

又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判

ニ付セラレタル者

六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其

証憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル

者

第八十三條 証人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述

ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第

百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シ

アヒマイナルヨリ

訴ヲ免シタル言渡

ヲ受ケシ者

○〔穩婆〕トリアゲ

ハト

○〔醫師穩婆以下

云々〕刑法ニ此法

律アリ就テ見ルヘ

シ

○〔第八十四條〕

証人數名ヲ共ニ訊

問スル時ハ互ニ雷

同シ其己レヲ知ル

テハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公証人若ク

ハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ

委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第八十四條 証人ハ他ノ証人及ヒ被告人ト各別ニ

之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル

時ハ証人ト他ノ証人又ハ被告人ト對質セシムルコ

ヲ得

第八十五條 豫審判事ハ証人ノ陳述ヲ確實ナラシ

ムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ

其他ノ場所ニ同行スルコヲ得

若シ証人同行スルコヲ肯セサル時ハ第七十六條

ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第八十六條 第五十六條第五十七條ノ規則ハ

所ヲ盡ク陳述セサルノ弊アリ又被告ノ面前ニテ訊問スル時ハ愛憎畏懼ノ念ヲ發シ遂ニ亦同上ノ弊ナキヲ能ハズ故ニ一人毎ニ別々ニ之ヲ訊問スルナリ

○〔第八十七條〕
皇族勅任官ハ其品位至テ貴キ者ナリ故ニ之ヲ法廷ニ呼

証人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第八十七條 皇族又ハ勅任官証人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第八十八條 書記ハ証人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ

其調書ニハ証人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲サ、ルノ事由ヲ記載ス可シ

第八十九條 豫審判事ハ証人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

証人ハ其陳述ヲ變更増減セシムルヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ証人ト共ニ署名捺印スヘシ若シ証人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記

出サズ所在ニ就テ陳述ヲ聽ク者トス

○〔鑑定〕見定メルコトニテ假令ハ人ヲ殺セシニ藥ヲ以テセシト思料スレバ醫師之ヲ鑑定シ又ハ土藏ヲ壞テ入リシニ刃物ヲ以テセシカ又ハ鐵槌ニテセシカト思料スレハ職人之ヲ鑑定スルノ類ヲ云フ

ス可シ

第九十條 証人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ要ムルヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑒定

第九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ

○〔第九十二條〕
 鑑定人出廷セザル
 モ勾引スルヲ許
 サ、ルハ証人ノ犯
 罪ヲ目撃シタル者
 等ト異ナリテ其呼
 出シテ受ケタル者
 ニ非レハ鑑定スル
 ヲ得サルノ理ナ
 ケレハナリ

○〔第九十八條〕
 鑑定書ハ鑑定人自
 カラ之ヲ作り其如
 命スルヲ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可
 キヲ記載スヘシ
 鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ
 從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得ス
 第七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス
 第九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ
 爲ス可シ其宣誓ハ第八十條ノ式ニ從フ
 書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書ノ紙尾
 ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置シ可シ
 第九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑
 定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法
 第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ
 對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス
 第九十五條 第八十一條第八十二條ニ記載シ

何ナル手續ヲ以テ
 鑑定シタルカ又手
 續ヲ爲シタル末如
 何ナル結果ヲ得タ
 ルカ及ビ何時ヨリ
 何時ニ至リタルカ
 ナ記スベシ

○結果ヲ得ザルト
 ハ死体腐敗シテ其
 毒殺ナルヤ否ヤ知
 ル能ハザルノ類

タル者ニハ鑑定ヲ命スルヲ得ス但急遽ノ際正當
 ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑
 定ヲ命スルヲ得

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可
 シ

第九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ
 職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セ
 シムルヲ得

第九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及
 ビ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ
 若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ
 鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ
 各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署

○〔契印〕ツギメニ
印ヲオス

名捺印及ヒ契印ス可シ
又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記
載シ書記ト共ニ檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置シ可シ
外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ
命シタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置シ可シ

○〔第二百條檢証
調書〕惡事ノ証據
トナルヘキ事ヲ取
リ調ベテ書付ル書

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ
費用ヲ給與ス可シ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕
罪アルヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要ス
ル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫
審ニ取掛ルヲ得

○〔終結〕落着ノ事

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定

メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ得

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト
雖モ豫審判事檢証調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シ
タル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヲ
記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨ
リ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリ
ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕
罪アルヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヲナク其
旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分
ヲ爲スヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スヲ得ス
證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヲナク之ヲ
聽ク可シ

○〔第二百三條豫
審判事ニ屬スル處
分〕豫審判事ノ權
ニテナシ得ラル、
處分

○〔第二百五條〕現行犯ニ付キ司法警察官ノ權ハ殆ント檢事ト異ナルヲナカラシム惟ダ令狀ヲ發スルヲ得サラシム

○〔第二百六條請求書〕吟味セシ處斯々ノ次第ニ付斯々處分アリヲシト求ムル書也

○〔若シ起訴云々〕

第二百四條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スルヲ得ス

▲參看○明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヲ得サル旨記載有之候得共當分ノ内現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦シカラス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送

吟味セシ處事カラ罪ニアダラス豫審判事ニ引渡スマデニモナシト思ヒシ時ハ直チニ放免ス

○〔第二百七條勾留狀ヲ解キ〕吟味スル間ハ勾留スルヲ許ス

○〔第二百九條〕檢事ハマノアタリ罪ヲ犯シタル者ヲ吟味セシニ罪狀明白

致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

第二百八條 豫審判事檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ス可シ

第二百九條 檢事ハ犯罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラヌ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヲ得

第九節 保釋

ニノ又豫審ヲ求ムルニ及ハスト思フ時ハ直チニ輕罪裁判所ヘ其者ヲ呼ヒ出シ處分スルナリ

○〔第二百十條保釋〕吟味中監倉ヘ

入レベキヲ其者何時ニテモ召シニ應シ出廷スルト云フニ由リ其証書ヲ書キ相當ノ金ヲ差出サシメ家ニ歸ス也

第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ証書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヲ得
被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得

第二百十一條 前條ノ証書ハ書記局ニ差出ス可シ
保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者

○〔無能力〕幼年ノ者カ又ハ女其他深キ辨ヘナキ者

○〔第二百十二條〕

保證ヲ爲スニハ必ラズ即時現金ヲ出スヲ要セズ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ出スカ又第二項ノ要件ヲ具有スル者ヨリ保證書ヲ出シテ保證金ニ充ルモ妨ケナシ

ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保証金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ

第二百十五條 保證金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條 豫審判事保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヲ必要ナリトスル

○〔第二百十七條〕

保釋サレシ者召シ
ニ應ゼス故其金ヲ
没入シタルニ其者
ノ罪ハ案外輕クシ
テモトモト監倉ヘ
入ル譯デナカリシ
トスル時ハ檢事ノ
見込チキ、其没入
金ヲ返ス

○〔第二百十八條〕

本條ノ規則ハ前條
ニ付キ解釋シタル

時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ没入シタル後免訴
ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル
可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタ
ル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還
付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ
移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁
判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消
シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トテ
問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊
ニ責付スルヲ得

▲參看○明治十年九月廿日第四十七號布告

所ヲ推シ以テ其至

當ナルヲ知ルベ

シ

○保釋ノ言渡シテ

取消ストハ第二百

十六條第二項第二

百廿七條ノ場合ノ

如シ

○〔第二百廿條〕犯

罪ノ場所性質又ハ

被告人ノ身分ニ因

リ管轄ニ非ル時ハ

管轄違ヒノ言渡シ

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何

時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシム可キノ證書ヲ裁判
所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四
時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷
セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消ス可シ

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非スト
シ又ハ他ニ取調ヲ要スルヲナシト思料シタル時ハ
豫審終結ノ處分ニ付檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切
ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス
可シ

ナシ又豫審既ニ終
 リ別ニ取調可キ事
 アラザル時ハ其罪
 ノ種類ニ應シ公判
 ナ渡スベキ裁判所
 ニ移スノ旨渡ヲ爲
 サ、ルベカラス然
 レモ豫審判事一名
 ニテ直チニ其旨渡
 シヲ爲スヲ得ズ
 必ラズ原告官タル
 檢事ノ意見ヲ聽ク
 ヲ要スルヲ以テ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタ
 ル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヲ得若
 シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ
 意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ
 第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ
 問ハス後ニ記載シタル旨渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可
 シ
 第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サ
 ルヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ
 要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ
 又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ
 第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ
 旨渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ「放免」ノ言
 渡ヲ爲ス可シ

訴訟書類ヲ檢事ニ
 送致スベキナリ

○〔第二百廿四條〕
 免訴無罪トナリ又
 ハ罪ヲ免サル、一

○〔第二百廿五條〕
 其罪違警罪ト思ヒ
 タル時ハ違警罪裁
 判所へ廻ス旨ヲ言
 ヒ渡シ其時其者勾
 留シアリタレハ之
 ナ免ス旨ヲ言ヒ渡
 ス

一 犯罪ノ証憑充分ナラサル時
 二 被告事件罪ト爲ラサル時
 三公訴ノ期滿免除ト爲リタル時
 四 確定裁判ヲ經タル時
 五 大赦アリタル時
 六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時
 本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ
 要償ノ訴ヲ爲スヲ得ス
 第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル
 時ハ違警罪裁判所ニ移スノ旨渡ヲ爲シ且被告人勾
 留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ旨渡ヲ爲ス可シ
 第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時
 ハ輕罪裁判所ニ引移スノ旨渡ヲ爲ス可シ
 被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル

○〔第二百二十七條〕犯シタル事重罪ナリト思フ時ハ重罪裁判所へ引渡ス旨ヲ言ヒ渡シ其節當人保釋カ又ハ責付コナリ居タルナレハ本日限り保釋又ハ責付ハサセスト初メノ保釋責付チ免シタル言ヒ渡シチ取消ス

○〔第二百廿八條

可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡チ爲ス可シ禁錮ノ刑ニ該ルキ者ト思料シタル時ハ保釋チ許シ又ハ責付チ爲スコトヲ得

若シ被告人未ダ勾留チ受ケサル時ハ令狀チ發スルコトヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋チ許シ又ハ責付チ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審チ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キコトヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由チ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡チ爲スニハ其理由チ明示シ若

豫審終結〕他ノ裁判所へ引渡サスシテ落着スルコト

○〔理由チ付ス〕言ヒ渡シコトスヤノ次第ト事柄チ加ヘル

○〔第二百三十條〕豫審ハ密行スル者ナルカ故ニ其終結ノ言渡ト雖モ判事口ツカラ宣告セズ必ラズ其言渡書チ作り之ヲ訴訟關係

シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其理由チ明示ス可シ免訴ノ言渡チ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其理由又犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ其旨チ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡チ爲スニハ犯罪ノ性質模樣証憑ノ充分ナルコト及ヒ其罪チ罰ス可キ法律ノ正條チ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本チ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障チ爲スコトヲ得

第二百三十一條 被告人チ逮捕スルコト能ハサル場合

人ニ送達シテ結局ノ如何ヲ知ラシム
乃チ關係人不服ノ
條件アレバ會議局
ニ故障スルコトヲ得
ヘシ

○〔第四章豫審上
訴〕吟味中不當ノ
處置アルチ上訴ス
○〔一管轄違ノ云
々〕當裁判所ノ扱
フ義ヲナシト申シ
立タルチ聞入レヌ

ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ
付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨
ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受ク
ルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス
第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原
告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キコトヲ民事裁
判所ニ請求スルコトヲ得
第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫
審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ
又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡畧ナル報告
書ヲ差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人
ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時コトモ故障ヲ爲スコ
トヲ得

○〔四越權ノ處分
云々〕其裁判所ノ
權限外ノ事ヲナス

○〔趣意書〕カク不
當ナル事ニ付上訴
スルト云フ趣意書

○〔第二百卅六條
判決〕故障ノ方筋
ヨキカ答辨ノカタ
ガヨキカヲ判決ス
○〔第二百卅八條
忌避〕此者ハ此豫
審判事ノ親類身寄

ヲ得

一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時
二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時
三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サ、ル時
四 越權ノ處分アル時
民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ
爲スコトヲ得

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所

ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ
故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ
送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得
故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責
付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其
執行ヲ停止ス

ナル故我ニ利ナシ
必ラス幾分カ一方
ノ別ヲ計ルト思フ
時ハ之ヲサケテ外
ノ判事ヲ掛リニ願
フ

○忌避ノ申立ハ直
チニ會議局ニ爲ス
コナ許サズ先ツ豫
審判事ニ申立テ其
棄却アリタル時故
障スルコトヲ得

○〔配偶者〕其妻

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判
事三名以上ニテ趣意書答辨書其他訴訟書類及ヒ檢
事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ
會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテ
ハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スコトヲ得

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ
民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌
避スルコトヲ得

一豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等
ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時

二豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人
又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ
收受シ若クハ聽許シタル時

○〔聽許〕内々ノ言
ヒ込ヲ承知スル

○〔第二百三十九
條〕忌避ノ申立シ
處其判事用ヒサル
時ハ其筋ヘ之ヲ申
立ル事ヲ得ルナリ

○〔第二百四十條
終結ノ言渡シ〕他
ノ裁判所ヘ引渡ス
トカ又ハ無罪放免
トカ也

○〔第二百四十一

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス
可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差
出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送
致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又
ハ棄却スルコトヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記
局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル
時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スコトヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明
書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又
ハ其申立ヲ棄却シタルニ付故障アリタル時ト雖モ
豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スコトヲ

條) 會議局へ判事
 カ忌避ヲ用ヒザル
 段ヲ申シ立シニ會
 議局ニ於テモ用ヒ
 ザル時ハ上告スル
 事ヲ得ル最モ公事
 ノ言渡スノミ後ナ
 ラデハ出來ストナ
 リ

得ス
 又急速ヲ要セザル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止
 スルヲ得
 第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ
 棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヲ得但豫審終結ノ言
 渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス
 第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定
 メタル原由アルヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料
 シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ
 回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ
 第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立
 ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫
 審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ
 請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル

○檢察官ハ原告官
 ナリ又訴訟關係人
 ノ一人ナリ訴訟關
 係人相互ニ忌避ス
 ルノ理ナシ故ニ之
 ヲ忌避スルヲ許サ
 ズタゞ其自カラ公
 訴ヲ行ナフニ忍ビ
 サルノ情實アル時
 ハ回避スルヲ許
 ス

處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヲ得
 第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴
 訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヲ得
 第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨ
 リ之ヲ忌避スルヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト
 思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヲ得
 檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ
 檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ
 第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ
 故障ヲ爲スヲ得
 民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫
 審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得
 被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲
 スヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言

トスル者ハ一日ノ内ニ故障ヲ申立シ立シカ否ヤヲ定ムベシ申立ントナラハ三日内ニ故障ノ申立書ヲ出シ申立サルナレハ初メノ日ノ内ニ相ヤメハ一日ヲ過テハヤムル事能ハス

○〔第二百四十九條〕假令ハ被告ヨリ故障ヲ申立タル

渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非ラサレハ故障ヲ爲スヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ中立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スヲ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スヲ得

時ハ原告ハ被告ノ故障ニ拘ハラヌンレニ附キマトウル故障ヲ爲スヲ得ル

○〔第二百五十條〕豫審終結ノ言ヒ渡シハ故障ノ期限内及ビ故障ヲ取調べ中又上告ノ期限内及ビ上告ノ取調べ中ハ未タ確定セザル者ナリ故ニ之ヲ執行スルヲ得ス

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スヲ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告入ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

但勾留ノ言渡シ及
 ビ保釋責付ヲ取消
 スノ言渡シニ付テ
 ハ被告人逃亡ノ恐
 アルヲ以テ之ヲ執
 行ス是第二百四十
 六條ニ於テ訴訟關
 係人ノ間ニ上訴ノ
 區別ヲ定メタルト
 同ク豫審ニ付テハ
 公益ヲ重ニスルヲ
 ナ主トスレバナリ
 ○(第二百五十五

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲ス
 ヲ得
 第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ
 判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所
 ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシ
 ム可シ
 第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違
 越權又ハ公訴受理ス可カラサルヲ發見シタル時
 ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スヲ得
 第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ
 起訴ヲ受ケタル者アルヲ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ
 受ケサル者アルヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ
 因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其
 報告書ヲ差出サシム可シ

條) 會議局ニテ故
 障ヲ取調ニ中共々
 罪ヲ爲セシ事ヲ訴
 ヘタルトシテ附
 メトヒタル犯罪ノ
 訴ヲ受クルニ之ヲ
 受ケサリシ事ヲ見
 出セハ檢事ノ請カ
 又ハ職掌ノ權ニテ
 他ノ判事ヲシテ豫
 審セシム
 ○(第二百五十七
 條) 上告ノ原由期

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ
 會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト
 共ニ之ヲ判決ス可シ
 第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言
 渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス
 可シ
 第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言
 渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得
 第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其
 言渡ニ對シ上訴スルヲ得キヲ及ヒ其期限ヲ記載
 ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送
 達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フヲナカル可シ
 第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マ
 テノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

限等ハ第四百十一條以下ニ之ヲ定ム
 ○〔第二百五十八條被告人上訴〕即チ故障及び上告ヲ爲スノ權アリト雖トモ之ヲ知ラザルニヨリ徒ラニ期限ヲ經過シ遂ニ其權ヲ行ナフコト能ハサルコト至ル者アラン是ヲ以テ法律ニ於テハ厚ク被告人ヲ保護セン爲メ其上訴ノ權アルコト上訴ノ期日幾日ナルコト告知スベシト

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ
 檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ
 重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事ニ速ニ其執行ヲ爲ス可シ
 第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ラズ
 新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

定メ以テ冤罪ニ服スルノ憾ナカラシム

○〔第二百六十條言渡確定〕吟味セシニ犯罪明白ナルニヨリ其筋ノ裁判所へ廻ストノ言渡
 ○〔第二百六十一條罪名ノ變更アルモ同一ノ事件〕事濟ミノ言渡ヲ受ケ其言渡ノ極リタル時ハ罪名ハ變レ得同シ事柄ノ訴ナレハ別ニ吟味サレヌ
 ○〔第四編公判〕吟

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ
 裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコト得
 又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルコト得
 第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辨論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ヲサレ時ハ其言渡ノ效ナカル可シ
 第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍

味

○〔第二百六十二條〕訴訟事件ハ書記局ノ帳面ニ書シタル順ニ吟味ナス

○〔裁判所長ハ云々〕罪ノ定マラサル者ヲ順番ナリトテ徒ラニ留置ハ不筋ニ付サキ吟味スルヲ得ルトナリ

○〔第二百六十三條公行〕ヒソカニセヌ事

○〔第二百六十四條公安ヲ害シ〕人

聽ヲ禁スルコトヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルコトヲ得若シ出廷シテ辯論スルコトヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルコトヲ得

辯護人ハ裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ免許ヲ得タル時ハ代官人ニ非ル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾留スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スコトヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

々ニ知レテヨロシクナキ

○〔又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スル〕姦通或ハ強淫等ノ事件

○〔第二百六十五條〕被告人ハモト罪アリト見認ラレタル者ナレトモ其是非ワカラサレハ身體ヲ束縛スル理ナシ最モ時ニヨリ番人ヲ付ル事アリ

○〔第二百六十六條辯護人〕其申シ立ノ間違サル爲メ

爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾留スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スコトヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルコト能ハサル時ハ痊癒ニ至ル迄辯論ヲ停止ス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關

或ハ充分ニ我見込
 ナ言フ事ノ出來ヌ
 時ニ問ヒ合セ又ハ
 代テ言ハシムル者
 ○〔第二百六十七
 條告戒〕ツゲイマ
 シムル
 ○〔第二百六十八
 條〕精神錯亂即チ
 心カ亂レシカ又ハ
 疾病ニ罹ル者ハ自
 ラ辯護ヲ盡ス可
 ハズ故ニ病癒ルノ

係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ
 若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終
 リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲ス可ナク裁判
 言渡ヲ爲ス可シ
 第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公
 判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ
 呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルコト非サレハ
 席裁判ヲ爲ス可カラズ
 豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコ
 能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定
 メ其期限内ニ被告人出廷セサル時ハ缺席裁判ヲ爲
 ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戸長ニ送達ス可シ
 第二百七十條 缺席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ
 用フルコトヲ許サズ但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷ス

後チ再タヒ辯論ノ
 席ヲ開カシム

○辨論中精神錯亂
 シタル者ハ其前ニ
 陳述シタル所ヲ忘
 ル、ノ恐アリ故ニ
 病直リテ後チ更テ
 ニ改メテ最初ヨリ
 辨論ヲ爲サシム普
 通ノ病ニ付テハ前
 言ヲ忘ル、コトナシ
 故ニ前ニ停止シタ
 ル所ノ手續キヨリ

ルコト能ハサルノ事由ヲ證明スルコトヲ得
 裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官
 ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルコトヲ得
 第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セス
 ト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對
 審裁判ヲ爲ス可シ
 第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ
 爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ
 稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止
 シ又ハ退廷セシムルコトヲ得
 第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル
 者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令
 ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判
 ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

更ラニ辯論セシム
 ○被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ辯論ヲ終リ裁判言ヒ渡シテ爲サントスルニ當リ病ヲ生ジタル者ニ付テハ前既ニ辯論ヲ盡シタルニ因リ後ヲニ至リ取調ベテ爲スナシ

○〔第二百七十六條〕裁判所ハ直チ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ
 第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ
 輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ
 第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ
 第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辯論ニ因リ發見シタ

ニ受タル事ハ裁判ス可ラス必ラス檢事カ豫審判事等ヨリ廻リタル者ヲ裁判スベシ但シ裁判中其事ニ附マトヒアル事ヲ見出シタルト白洲ニ於テ犯シタル罪ハ其限リニ非ス

○〔第二百七十七條〕檢察官以下ノ人ハ裁判所ニ於テ

ル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス
 若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヲ得
 第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハズ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヲ得
 裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヲ得
 第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

吟味ノ初マリヨリ
 言渡シマテノ間イ
 ツニテモ管轄違ヒ
 (カ、リ違ヒ)又公
 訴ノ受理スベカラ
 サル事ヲ受理セシ
 ヲ受理スヘカラス
 ト申立ラル、ヲ得
 ル

○〔第二百七十八
 條〕管轄違又ハ公
 訴受理スベカラサ
 ルノ申立ヲ棄却シ

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三
 十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪
 裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書
 記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヲ得
 豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁
 判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦
 同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ル
 マテ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ
 爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五條マテ
 ニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル

タル時ハ其申立人
 ヨリ直チニ上訴ス
 ルヲ許ス是レ其
 關係至大ナルヲ以
 テ本案ノ裁判ヲ待
 ツノ違アラサレバ
 ナリ

○〔第二百八十三
 條〕證據ニニナシ
 豫審ニ於テ法律上
 證據ト爲スベキ者
 ハ公判ニ於テモ亦
 證據トスルナリ例

時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ
 但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ
 於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ
 請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作り
 タル調書及ヒ檢証書類ヲ朗讀セシムルヲ得

是等ノ書類ハ原被証人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス
 第二百八十五條 調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢察
 官其他訴訟關係人ヨリ証人トシテ之ヲ呼出シ又ハ
 裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴

へハ証人ノ陳述ノ如キ豫審ニ於テ証據ノ一ト爲ス公判ニ於テモ亦然リ

○〔第二百八十四條〕公判ハ固ト口陳辨論ヲ用ヒ書類ニ依ラザルヲ原則トス然レモ時宜ニヨリ調書ヲ朗讀セシムルコトアリ是レ事實ヲ分明ナラシムル爲メ必要ナリ

訟關係人ヨリ其裁判所ノ免許ヲ得テ調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スコトヲ得

第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル証人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル証人ノ陳述書ハ更ニ其証人ヲ呼出サ、ル時証人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ証人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條 証人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラズ又陳述前辨論ニ立會フ可カラズ

第二百八十九條 証人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

トスル場合ニ於テス

○官吏ノ作リタル書類ハ証人ノ陳述ト其效ヲ同フスルヲ以テ反對ノ証ヲ以テ之ヲ攻撃スルコトヲ得ベシ

○〔第二百八十六條〕豫審中訊問シタル証人ニ付テハ其陳述書アルヲ以テ更ニ公判ニ呼出

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

第二百九十條 証人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ証人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルコトヲ得

第二百九十一條 証人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレバ之ヲ訊問スルコトヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ証人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

訴訟關係人ハ辨論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ証人ヲ訊問スヘキコトヲ裁判長ニ求めルヲ得

スヲ要セザルニ似タリ然レモ公判ハ書類ニ依ラザルヲ原則トスルヲ以テ口ツカラ陳述セシムル爲メ訴訟關係人ヨリ之ヲ呼出スヲ許ス

○〔第二百九十二條〕証人被告人ヲ曲庇又ハ陷害スル爲メ詐僞ノ陳述ヲ爲スハ刑法二百十

第二百九十二條 証人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其証人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得

第二百九十三條 証人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

八條以下ニ定メタル罪ヲ犯スナリ故ニ之ヲ取押ヘテ豫審判事ニ付ス

○証人ノ陳述不實ナリトスル時ハ固ヨリ之ニ依ルコトナカルベシト雖トモ信スルノ厚キトキハ知ラズ識ラズ之レニ泥ムノ恐ナシトセズ故ニ本案ノ裁判ヲ延期スルコト

一違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル証人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラズ

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其閉廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 証人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其

ヲ訴ス
 ○問テ曰ク本條禁錮以上ノ刑ニアタル可キ者云々トアリ其禁錮以下ニアルベキ者ハ如何ノ處分スルヤ答テ曰ク第二百七十二條ニ從ヒ公廷内ニテ違警罪ヲ犯シタル者トシテ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スベシ
 ○〔第二百九十三條〕豫審ハ重罪輕罪ノ事件ニ限リ之ヲ行ナフ故ニ其証

他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得
 檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
 第二百九十六條 証人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ得但延期シタル時ハ其証人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ
 第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

人出廷セサル時ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ科ス公判ニハ違警罪アリ其本犯科料ノ刑ニ處セラル、ニ証人ハ輕罪ノ刑即チ罰金ノ言渡シヲ受ルノ理ナシ故ニ本條ヲ設ケ違警罪事件ト輕罪以上ノ事件トノ間差等ヲ定ム
 ○被告人欠席シタル時ハ原告ノ申立ヲ聽キ欠席裁判ヲ爲スノニ其呼出シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ証人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ
 第二百九十八條 被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第二百五十六條第五十七條ノ規則ニ從フ
 第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ
 裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得
 第三百條 證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ
 檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヲ

タル證人出廷セサルモ毫モ審判ニ妨ケナク又被告人ニ害ナシ故ニ科料罰金ヲ言渡サザルナリ

○〔第三百條證憑調濟〕證據モノシラベスミ

○〔發言〕申立ヲハシメル

○〔第三百一條〕檢察官之レ公訴不受理ノ者ナリト棄テタルモ本案ニ付見込アレハ相當ノ裁判ヲ爲スベシ

ヲ得ス
檢察官其他訴訟關係人ハ送ヒニ辯論ヲ爲スヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヲ得
又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セ

○〔第三百二條〕公

判ノ手續キ規則ニ背キタリトシテ異議爭論ヲ生スル時ハ直チニ之レヲ判決ス此判決ニ對シテハ上訴スルヲ許スモ元來事ノ重大ナラサルニヨリ本案ノ裁判ヲ待シ

○〔第三百二條〕民事擔當人ハ被告人私訴ニ付敗訴スル時ハ賠償ノ責メニ任スル者ナルカ故ニ被告人ヲ保庇ス

シムルヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ
免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證憑ナキヲ明示ス可シ

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ
私訴ニ付キ取調未タ充分ナラザル時ハ公訴ノ裁判

ル爲メ自ラ訴訟ニ
關スルヲ許ス
○又民事原告人ハ
賠償ノ言渡ヲ得ル
モ更ラニ民事擔當
人ニ對シ訴ヲ起サ
ザルヲ得サルヲ以
テ其煩勞ヲ省ガ爲
メ民事擔當人ヲソ
訴訟ニ關係セシム
ルヲ得民事擔當
人ノ訴訟ニ關係ス
ルニ付異議アル時
ハ直チニ之ヲ判決
ス此判決ニ付テハ
直チニ上訴スルヲ
許ス前條ニ定ム

アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヲ得
第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所
ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當
ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ
免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判
費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ
私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之
ヲ擔當ス可シ
第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トチ問
ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシ
ト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ
第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内
又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停
止ス

ル所ニ異ナリ

○〔第三百十二條
非常ノ變災厄難〕
火事地震水難又ハ
戰爭ノ爲メ家財ヲ
亡失スルカ或ハ俄
カノ大病等ヲ云フ
○〔第三百十四條〕
原被ノ辯論全ク終
リタル時ハ直チニ
裁判ヲ爲ス者トス
然レモ事件繁雜シ
テ法律適用ノ爲メ

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡
シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ爲スヲ
不得ス
第三百十一條 勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保
釋ヲ求ムル時ハ其申立ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨ
リ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ
第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄
難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ
證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル
權利ヲ回復スルヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨ
リ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添へ上訴ヲ爲
ス可シ
第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ
送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ

又ハ言渡シヲ作ル
爲メ數時間ヲ要ス
ル時ハ次日ニ至リ
言渡シヲ爲スヲナ
許ス

○民事ニ干預シタ
ル官吏ノ氏名ヲ記
載スルハ裁判所ノ
構成規則ニ背カサ
ルヲ示ス爲ナリ
○〔第三百十五條〕
裁判言渡シ書ハ當
然之ヲ訟訴關係人

得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察
官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判
決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ナシテ
其旨ヲ訟訴關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ
本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ
原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可
シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ
於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ
裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ
署名捺印ス可シ

ニ下付セス其請求

アリタル時ハ謄寫
ノ費用ヲ納メシメ
テ之ヲ與フ是レ裁
判ノ實ハ判事公廷
ニテ口ツカラ言渡
シタル所ニアリテ
言渡書ニ存スル者
ニ非サレバナリ

○〔第三百十六條〕
本條ハ第二百五十
八條ノ規則ト其趣
意異ナルヲナシ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其
事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訟訴關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡
書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルヲ得但上訴ノ爲メ
其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下
付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時
ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及
ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヲ及
ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリ
タル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ
其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ
若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其
告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

○〔第三百十七條〕
 公判始末書ハ開廷ヨリ裁判落着言渡シニ至ルマデ爲シタル手續キ及其間ニ生シタル事件ヲ記載スル者ニシテ上訴アリタル場合ニ於テ其上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニテ原裁判手續キ法律ニ背クヤ否ヤチ知ルハ此始末書ニ

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

- 一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ及ヒ其事由
- 二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述
- 三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サ、ル時ハ其事由
- 四 原被ノ證據物件
- 五 辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヲ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決
- 六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルヲ

アリ

○〔第三百十八條〕
 本條末項ノ規則即チ豫審判事ヲシテ代ラシムル云々トハ重罪ノ裁判ニ限リ用フ可キ者ニシテ他ノ事件ニ付テハ豫審判事ナル者ヲ置クヲナシ第三百八十七條ヲ見ルヘシ

○〔第三百十九條〕
 書記ハ公廷ニ於テ審判中ノ手續キ及ヒ其中ニ生シタル事件ヲ錄取スト雖

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル事件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載スヘシ

辯論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ

辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ

トモ聞クニ隨テスルニ因リ自ラ文辭ヲ省クナルベク又或ハ文字ニ換ルニ符號等ヲ以テスルヲアルベク故ニ言渡シヨリ三日ノ猶豫ヲ置キ整頓ナサシム

公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其証人ヲ呼出サハル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其

作り之ヲ送致スルノミ

○〔第三百廿一條〕末項上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ事件ヲ移ストハ最初其事件ヲ輕罪又ハ重罪ト誤リ豫審ヲ行ナヒ故障ノ末輕罪裁判所會議局ニテ違警罪ナルヲ發見シ之ヲ違警罪裁判所ニ付シ又ハ大審院ニテ他ノ違警罪裁判所ノ言渡ヲ破毀シ其事件ヲ送付スル等ノ場合ヲ

呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スヲ得

第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ証人トシテ其陳述ヲ聽クヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事

云フ
 ○〔第二百二十八條〕被告人ニ向テ告サレタル事カラチ承知スルヤ否ヤチ問ヒタゞスナリ
 ○被告人代人チ以テ白狀ヲ爲ストモ容易ニ之ヲ信ズベカラ必ズラズ本人ニ於テ署名捺印シタル書面ヲ差出サシム
 ○〔第二百廿九條〕違警罪ハ罪ノ最モ小ナル者ナリ以テ白狀アリタル時ハ

件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ
 第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ
 官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ
 檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ
 第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ
 若シ被告人代人チ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ
 第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證據ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヲ得

之ニ依リテ直チニ裁判ヲ爲スヲ得セシム
 ○〔第二百三十條〕法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳スルトハ此罪タル刑法何條ニアタル者ナリト申立ツルヲ云フ
 ○民事原告人ハ損害ヲ被リタル事件ニ付其証ヲ舉ケ然ル後チ若干圓ノ償金ヲ求ムル旨ヲ申立ツヘシ
 ○〔第三百三十一條〕訴訟關係人出

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證據アル時ハ之ヲ差出ス可シ
 第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
 民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
 被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ
 第三百三十一條 呼出チ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ
 民事原告人出廷セサル時又同シ
 第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

延セサル時ハ一方ノ者ノ請求スル所ヲ聽キタルノミニシテ裁判ヲ爲ス之ヲ欠席裁判ト云フ蓋シ此闕席裁判ハ必ラス欠席者ノ不利益ト爲ル可シト雖ドモ固ト出廷セサルノ過失アルニ因リ亦止テ得ザル所ナリトス

○〔第三百三十七

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

條〔甲裁判所ニ於テ被告人ヲ吟味セシニ其罪重罪カ或ハ輕罪ニシテ乙裁判所ノ掛リト知レシ時ハ其旨ヲ言ヒ渡ス者トス

○〔治安裁判所ノ終審ノ金額〕治安裁判所ハ違警罪裁判所ナリ終審ノ金額トハ即罰金或ハ科料金ヲ云フ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得ス

第三百三十五條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヲ得

第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヲ得

▲參看○明治十四年九月第四十五号布告

刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ控訴又

○〔擬律ノ錯誤〕法律ニ當テ刑ヲ言ヒ渡シタルニ其刑ノ間違ヒヲ云フ

○〔第二百卅九條〕控訴ハ輕罪裁判所ニ爲ス者ナレ其期限短縮ナルヲ以テ先ツ違警罪裁判所ニ其旨ヲ申立シム
○欠席裁判ヲ受ケタル者ハ故障ヲ爲

ハ上告ヲ爲ス者アルキハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシム可シ若シ豫納スルヲ能ハザルキハ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ許サズ
一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時
二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時
三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル理由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達

サズシテ控訴ヲ爲スヲ得此場合ニ於テ少シクハ期限ヲ長フス

○〔第三百四十三條〕控訴ハ輕罪裁判所ニテ判決スルヲ以テ其裁判ノ法式ハ後章ニ定ムル所ニ從フ然レモ証人トナルベキ者ハ訴訟關係人ヨリ隨意ニ之ヲ呼出ヲ

アリタルヨリ五日內トス
控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ
若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ
第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ
呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ
証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ

得ス必ス裁判長ノ
 訴シアルヲ要ス是
 レ偏ヘコ費用ヲ省
 カンガタメナリ
 ○〔第三百四十四
 條〕控訴ヲ受理シ
 タル裁判所ハ調ベ
 ノ上原裁判所ノ言
 渡ガ正當ナリトス
 レハ其旨ヲ言渡シ
 又不當トスレハ之
 ヲ取り消シテ更ニ
 裁判スルノ言渡シ

猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ
 第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマ
 テ何時ニモ附帶ノ控訴ヲ爲スヲ得但附帶ノ控
 訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヲ得
 第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲
 スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ
 檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非
 サレハ新ナル証人又ハ始審ニ於テ陳述シタル証人
 ヲ呼出スヲ得ス
 第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原
 裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ
 更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ
 被告人ノニ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重
 キ刑ヲ言渡スヲ得ス

ヲ爲ス者トス
 ○〔第三百四十五
 條〕控訴ノ裁判所
 ニモ亦闕席スル者
 ナシトセズ故ニ第
 三百卅一條以下ノ
 規則ヲ適用ス
 ○〔第三百四十八
 條〕呼出狀ニ記載
 スベキ條件及ビ被
 告人出庭ニ付猶豫
 ノ期限ヲ與フルコ
 ハ違警罪ニ同シ

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ
 第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴
 ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス
 第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事
 件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得
 ▲參看○明治十四年九月第四十四号布告
 違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フ可
 シト雖トモ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内
 便宜取計ヒ其裁判言渡ニ付テハ上訴ヲ許サス
 同年九月第四十五号布告(全文ハ第三百三十八條ニ揭
 ケタルヲ以テ畧ス)
 第三章 輕罪公判
 第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因
 テ公訴ヲ受理ス

○〔第三百五十一條〕第七條第二項ニ從ヒ檢察官ヨリ直チニ公訴ヲ爲シタル時ハ未タ豫審アラザルヲ以テ時宜ニヨリ公判前檢証處分ヲ爲ストナサズ

○〔第三百五十四條〕罰金ノ刑ニアタルベキ被告人又ハ代人出廷セザル

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得

第三百五十條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經

時ハ直チニ闕席裁判ヲ爲ス禁錮ノ刑ニアタルベキ者ハ

第二百六十九條ノ規則ニ從フニ非ザレハ闕席ノマ、裁判スルヲ許サズ

○〔第三百五十六條〕三被告人裁判執行云々闕席裁判セラレタレハ裁判ノ執行ニヨリ刑ノ言渡ヲ聞キ知リ其

サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被告事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被証人ノ陳述ヲ聽キ且証據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲ストヲ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第

證據アルトキ

○〔第三百五十七條〕裁判所ニ於テハ會テ豫審判事豫審ヲ爲シタルニ拘ハラズ事實取調未タ充分ナラザルニ因リ裁判ヲ下シガタシトスル時ハ訴訟關係人ノ請求アルト否トヲ問ハズ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從ヒ

二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スヲ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヲ得

一被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ證アル時

豫審ノ處分ヲ爲スヲ得ル

○又豫審ヲ經ス檢事ヨリ直チニ被告人ヲ公判ニ付シタル場合ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ條件ヲ定メテ豫審ヲ行ナハシムル權アリ

○〔第三百六十條〕輕罪裁判所ニ於テ被告事件カ重罪ナ

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スヲ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル証人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ

ル時ハ則チ管轄違
ヒナル故其管轄へ
廻ス者トシ若シ未
タ豫審ヲ經サル者
ナル時ハ豫審判事
ニ引渡ス者トシ共
ニ言渡ヲ爲スヘシ
○〔第二百六十一
條〕前條ニ從ヒ管
轄違ノ言渡ヲ爲ス
ト雖モ既ニ豫審ヲ
經タル時ハ豫審判
事ニ送付スルニ及

言渡ヲ爲ス可シ
本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免
ノ言渡ヲ爲ス可シ
第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁
判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ
言渡ヲ爲ス可シ
第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡
ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スル
ノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人勾留ヲ受ケサル時ハ勾
引狀ヲ發ス可シ
訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事
ニ送致ス可シ
第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其
裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

ハズ會議局ニ送付
ス

○〔第三百六十四
條被告人禁錮云々〕
已ニ保釋責付ニナ
リ居タルガ故ニ其
刑ヲ言ヒ渡サルレ
バ保釋責付ハ自カ
ラ消ユル也
○〔第三百六十五
條違警罪事件云々〕
輕罪ナルヲ違警罪
ト言渡シアリタル

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ
規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付
スルノ言渡ヲ爲ス可シ
第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シ
タル場合ニ於テ新ナル證據ヲ發見スルヲナシテ
其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス
可シ
檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ
第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ
大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁
判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置
スルノ言渡ヲ爲ス可シ得
又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ
爲ス可シ得

トキ

○〔無効ノ記載アル規則云々〕斯ノ如キハ無効ナリト兼テ規定アル規則ニ背キ效アル如クスル

○〔第三百六十六條〕闕席裁判ニ付テハ故障ヲ爲スヲ要スルト雖モ、ニ變則ヲ設ケ以テ故障ヲ爲サスシテ

第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證憑充分ナ

ル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ
被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヲ得

第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルヲ得

○明治十四年第四十五號布告〔第三百八條參看〕

一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時
二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

直チニ控訴ヲ爲ス

トテ訴ス是レ故障

ヲ爲シ然ル後チ其

判決ニ對シ控訴ヲ

爲スハ頗ル迂遠タ

レハナリ

○〔第三百六十九

條〕控訴裁判所ニ

於テ控訴ノ審理中

被告事件重罪ナル

トチ知リタル時ハ

會議局ニテ更ニ取

調ヲ爲シタル後チ

三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テ

ノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四 檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤

又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日

内ニ之ヲ爲スヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ

何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スヲ

得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日內ニ之

ヲ爲ス可シ

第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタ

ル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨ

リ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

管轄重罪裁判所ニ

移スベシ

○本條ノ處分ハ檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル時ニ限り施スベキ者ニシテ被告ノ人ノミ控訴シタル時ハ假令其事件ヲ重罪ナリトスルモ之ヲ重罪裁判所ニ移スコトヲ得ス第三百四十四條第二

第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

○明治十四年九月第四十五号布告(第三百三十八條參

看)

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可

項ニ從カヒ相當ノ言渡シヲ爲スコトヲ得

○(第三百七十三條)重罪ニ付テハ

檢察官ハ必ラス公訴狀ヲ作り以テ起訴ノ主旨ヲ辨明セザル可ラス而シテ該狀ヲ作ルハ檢事長ノ任ナリトス然レニ始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開

ク時ハ檢事長ヨリ
其裁判所檢察官ニ
命シテ之ヲ作ラシ
ムルモ妨ケナシ

○〔第三百七十四
條〕公訴狀ニ記載
スベキ條件ハ本條
之ヲ別記スルト雖
トモ此他詳細ニ涉
ル者ハ固ヨリ妨ケ
ナシタゞ本條ハ欠
クベカラサル者ノ
ミナ指示スルノミ

キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様
- 二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地
- 三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑
- 四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ
概畧

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言
渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記
載ス可カラス

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一
ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シ
タル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル
上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スヲ裁判所長ニ請求スル

ヲ得

○〔第三百七十八
條〕辯護人ヲ選任セ
シヤ否ヤヲ問フ

被告人一ノ間違ア
ルモ枉冤ニ陷イル
ガ故ニ辯護人ヲ選
任セシメ其思フ處
ヲ充分ニ云シムル
ナリ

○〔第三百七十九
條〕本條ハ辯論中
ニ至リ辯護人正當
ノ差支ヲ生シ又ハ

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重
罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯
論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタ
ル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五
日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタ
ル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時
ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊
問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以
テ其裁判所々屬ノ代人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人ヨリ之ヲ改選スベキ事由例ハ民事原告人ヨリ贈物ヲ受ケ因テ故サテニ辯護ヲ盡サハル等ノ事ヲ申立ル場合ニ於テ更ラニ辯護人ヲ選任スヘキヲ定ム

○〔第二百八十條〕
 公判被告人ヲ訊問スルニハ必ラズ書記ノ立會ヲ要ス書

被告人及ヒ代言人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代言人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヲ得
 辯論人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヲ得ス

第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

記ハ調書ヲ作り訊問答辯ヲ記載シ且第三百七十八條ニ從ヒ辯護人選任アリタルヲ証明スベシ

○辯論始マリタル後前條ニ從カヒ辯護人改選ノヲアル時ハ特ニ調書ヲ作ルヲ要セス公判始末書中ニ記入スベシ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ官渡ノ効ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヲアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヲ得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判官渡アルマテ被告人ト接見スルヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受ツル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因

○〔第三百八十一條〕第三百七十八條ニ定ムル如ク重罪事件ニ付テハ必ず辯護人ヲ選任ス可シ然ラズシテ辯論ヲ爲シタル時ハ被告人ノ不利尤モ甚シ故ニ刑ノ言渡シアレハ之ヲ無効トス若シ無罪免訴ナレハ辯護人ナキニ拘ラス被告人不

リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ
 被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送致ス可シ
 第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコトヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキコトヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得
 第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ
 第三百八十六條 裁判長ハ開廳ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニ於テ開廳ス可キコトヲ陳

利ニ陷ラサルヲ以テ其言渡ハ効アル者トス

述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラズ
 第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ涉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スコトヲ得
 第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ
 裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ
 若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ
 第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ
 其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲

スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辨明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ、ル可カラス

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後証憑ヲ差出スニ從ヒ其証憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反証ヲ差出スヲ得可キヲ被告人ニ告知ス可シ

○〔第三百九十二條反証〕假令ハ原告ガ斯ノ証據アリトスル時被告ハ其

証據ハ此証據ニテ取消スルナリトスル証據モノ

○〔第三百九十三條〕原告証人ノ陳述ニ付テハ被告人必ラズ其當ヲ得サルヲ辨ズルヲ欲スルヲ以テ其意見ヲ問フナリ

○〔第三百九十四條〕証人ハ更ニ之ヲ訊問シ又ハ他ノ

第三百九十三條 裁判長ハ原告証人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條 証人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ証人ヲ訊問スルヲ又証人ヲシテ他ノ証人ト對質セシムルヲ請求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ証人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其証人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヲ得

証人ト對質セシムルコトアルヲ以テ陳述後ト雖トモ直チニ退廷セシメス必ラズ裁判長ノ許シテ要ス

○〔第三百九十五條〕被告人ノ面前ニ於テハ証人愛憎畏懼ノ念頻リコテ充分陳述シ難キコトアリ此場合ニ於テハ已ムコトヲ得ズ被

裁判長ハ証人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルコトヲ言渡ス可シ
第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルコトヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ
第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス
第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察

告人ヲ退廷セシメ其間ニ陳述セシム然レモ公判ハ固ト口論陳述ヲ主旨トスルヲ以テ其陳述後更ラニ被告人ヲ呼ヒ入レ裁判長ヨリ証人ノ陳述シタル所云々ナリト告ケ知ラシム可シ

○〔第四百一條〕二項原被ノ要償ト云フハ即チ民事原告

官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ
被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルコトヲ辯論スルヲ得

第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ
被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得
檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ
裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルコトヲ得但閉庭前之ヲ判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ
又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ
第四百一條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言

人ヨリ被告人ニ對シ要ムル所并ビニ
 被告人ヨリ第十六
 條ニ從ヒ告訴人告
 發人又ハ民事原告
 人ニ對シ求ムル所
 フ云フ

○〔第四百二條本
 會〕重罪裁判所ヲ
 開キタル日

○〔第四百二條〕上
 告ニ付テハ第四百
 十條以下ヲ見ルベ

渡チ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ
 又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ
 裁判言渡チ爲ス可シ

第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶
 セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察
 官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ
 判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於
 テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ
 對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四百四條 闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ
 公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ
 又原被証人ノ陳述ヲ聽ク可シ
 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告

○〔第四百四條〕闕
 席裁判ハ第二百六
 十九條第二百七十
 條ニ定メタル條件
 アルニ非レバ之ヲ
 爲ス可カラス

○民事擔當人ハ檢
 察官ノ陳述ニ付辯
 論スルヲ得ス若
 シ之ヲ許ス時ハ必
 ラズ被告人ノ無罪
 ナ辨シ以テ僥倖ニ

人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
 民事擔當人ハ答辯スルヲ得

第四百五條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係
 人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢
 察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對
 シ上告ヲ爲スヲ得

第四百七條 闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者
 ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲ス
 ヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可
 シ

第四百八條 故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪
 裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

法律ヲ免カレシメ
ソノ企望シ遂ニ
第二百七十條ノ規
則ヲシテ無用ノ者
ニスレハナリ

○〔第四百七條〕闕
席裁判セラレ已ニ
既ニ刑ヲ言渡サレ
タル者逃亡シタル
アトコテ其言渡ヲ
不當トスレハ期滿
免除内ナレハ何時
ニテモ其故障ヲ申
立ラル、ナリ但期
滿免除後ナレハ其
身無罪人トナレハ
故障ヲ云フモ無益

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否
ヲ判決ス可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ
次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ
後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲
ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シ
タル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判
ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言

ルハモトヨリ也

○〔第五編〕上告ハ
上訴ノ一ニシテ最
終ニ爲スヲ得ベ
キ者ナリ其旨趣ト
スル所ハ事實ノ覆
審ヲ求ムルニ非ズ
原裁判法律ニ違フ
アルヲ以テ之ヲ破
毀セラレシムヲ請
フニアリ

○〔第四百十條〕公
訴ノ審判ニ對シ上
告スルヲ得ベキ
者ハ檢察官被告人
也而モ其上告スル
ノ原由アルニ非レ

渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得

○明治十四年九月第四十五号布告(第三百三十八條參
看)

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ
管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタ
ル時

四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又

ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ
申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カ
サル時

ハ之ヲ受理セズ乃
 ナ本條其理由ヲ定
 ム
 ○一第二百卅七條
 ニ定メタル理由ア
 ルモ忌避ノ申立ヲ
 認可セサル等法律
 ニ背キタル時ヲ云
 フ○二第二編ニ定
 メタル裁判所構成
 ノ規則ニ背クノ例
 ハハ判事三名ニテ
 重罪ヲ裁判シタル
 時ヲ云フ
 ○三管轄裁判所ナ
 ルニ管轄違トシ又
 管轄違ナルニ管轄

七裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ
 爲サズ又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得可キ場合
 ナ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲
 シタル時
 八裁判言渡ヲ公行セズ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ヲ
 シテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時
 九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セズ又ハ其
 理由ノ齟齬アル時
 十擬律ノ錯誤アル時
 十一越權ノ處分アル時
 第四百十二條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ
 於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタ
 ルコト又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告
 チ爲スコトヲ得ス

ナリト言渡シ若ク
 ハ豫審終結或ハ公
 判ニ於テ管轄ニ非
 ル裁判所ニ移スノ
 言渡シヲ爲シタル
 時ヲ云フ
 ○四法律ニ於テ此
 規則ニ背キタル時
 ハ何々ノ効ナカル
 ベシト特ニ記載シ
 アルニ拘ラズシテ
 其規則ヲ守ラザル
 時又ハ斯ノ如キ特
 別ニ無効トスベキ
 旨ヲ記載セスト雖
 トモ規則ニ背キタ
 ル處分アルニ因リ

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ
 私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十
 條ニ定メタル理由ニ付キ上告ヲ爲スコトヲ得
 第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマ
 テ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得
 大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得
 第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ
 付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付
 テハ言渡アリタルヨリ起算ス
 第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリ
 タル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除ク
 ノ外其執行ヲ停止ス
 第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ
 原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

訴訟關係人ヨリ異議ヲ申立ツルモ之ヲ認可セザル時ヲ云フ

○〔第四百十四條〕
上告ノ期限ハ三日ナリト」三日内ニ上告スヘキヤ否ヤヲ定ムルナリ上告セントスレバ三日内ニ上告スル旨ノ申立書ヲ原裁判所ヘ差出ス(但シ申立書トハ上告ノ趣意書ニ非ス)

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ
第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作り一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ
檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿册ニ登記ス可キヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ

○〔第四百廿一條〕

檢察官ヲ除クノ外上告ノ關係人ハ代言人ヲ差出スヲ得若シ事件ヲ重罪

ナリトスル場合ニ
於テ被告人代理人
ヲ選任セサル時ハ
保護ノ爲メ官ヨリ
代理人ヲ付ス是レ
第二百七十八條ノ
規則ト權衡ヲ保タ
シト主トシテ也
○〔第四百二十三
條其趣意ヲ擴張〕
趣意ノ未ダツクサ
ゞル所ヲ補ヒテ其
意ヲオシヒロムル

選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代
人中ヨリ之ヲ選任ス可シ
第四百二十二條 院長ハ刑事局判事中心ニ專任判事
一名ヲ命ス可シ
專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可
シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ
第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事
ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ
其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヲ得
專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタ
ル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ
第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日
時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代理人ニ報知ス可シ
第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事

ナリ

○〔第四百二十八
條〕大審院ハ事實
ヲ審判セサルヲ以
テ原言渡シヲ破毀
スル時ハ更テニ事
實ニ付裁判ヲ爲サ
シムル爲メ他ノ裁
判所ニ其事件ヲ付
スベシ
○〔第四百廿九條〕
法律適用ヲ誤マリ
テ裁判ヲ爲ル時ハ

其報告書ヲ朗讀ス可シ
檢事長及ヒ代理人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ
私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス
可シ
第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代理人
ヲ差出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ
第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトス
ル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ
第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡
ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其
言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ
言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此
限ニ在ラス
第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴

大審院ニテ更ラニ
適當ナル法律ノ正
條ヲ施用シ又公訴
消滅シタル者ヲ受
理シ或ハ消滅セザ
ル者ヲ受理セサル
コアル時ハ原ノ言
渡シヲ取消タル上
ニテ更ニ受理ス可
カラザルノ言渡シ
ヲ爲シ若クハ受理
スベシトシテ相當
ノ判決ヲ爲スベシ

ヲ受理シ又ハ受理セサルコトニ因リ原裁判言渡ヲ破
毀シタル時ハ其事件ヲ移スコトナク大審院ニ於テ直
チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ
第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタル
コアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサル時ハ
其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク止テ其手續ヲ破
毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ
上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル
時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律
ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ
他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ
直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ

○〔第四百三十條〕

訴訟ノ手續規則ニ
背キタル時ハ利害
ヲ後ノ手續ニ及ホ
スノ恐レアリ故ニ
之ヲ取消タル上ニ
テ其事件ヲ他ノ裁
判所ニ移スヲ以テ
正則トス然レモ後
ニ利害ナキ時ハ之
ヲ他ニ移シテ裁判
セシムルモ其利益
ナシ故ニ其手續ヲ

裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他
ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ
接近シタル同等ノ裁判所ヲ定テ可シ其單ニ私訴
ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ
者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對
シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑
ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場
合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡
確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因
リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スコトヲ

取消スニ止マル

○〔第四百三十七條〕哀訴ヲ爲スヲ許スト雖モ其期限ヲ定メザレハ大審院ノ判決永ク確定セザルニ至ラン故ニ三日内ニ其申立ヲ爲サシム

○〔第四百三十八條〕三日間執行ヲ停止スルハ其哀訴ノ期限内ナルヲ以

得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヲ得

一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サシムル時

三同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時
第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手

テナリ

○再審ノ訴トハ事實ノ錯誤アル場合ニ於テ其調ベ直シヲ求ムル者ヲ云フ

○〔第四百卅九條〕再審ノ訴ハ重罪輕罪ノ事件ニ付キ之ヲ爲スヲ許シ違警罪事件ニ及ハス是レ其事件瑣末ナルヲ以テナリ又被告人ノ利益ノ爲メ

人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生

ニ爲スヲ得ルノ
 ミニシテ如何ナル
 不正ノ裁判アリテ
 有罪ノ法網ヲ免カ
 レシメタリトモ再
 ビ之ヲ訴フルヲ
 許サス是レ再審ノ
 訴ハ元來無事ヲ保
 スル爲メニ設ケタ
 ル者ナレハナリ

○〔二同一ノ事件
 云々〕甲ガ乙ヲ殺
 シタルト見認メ裁

存シ又ハ犯罪前已ニ死去シタルノ確證アリタル
 時

二同一ノ事件ニ付キ其犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡
 チ受ケタル者アリタル時

三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時
 其場所ニ在ラザルヲ証明シタル時

四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタ
 ル者アリタル時

五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アル
 ヲ証明シタル時

第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スヲ得可キ者左ノ如
 シ

一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判

所ノ檢事長

判ノ末ハ其刑ノ言
 ヒ渡シヲナシタル
 ニ其仲間ニ非ズシ
 テ外ニ乙ヲ殺シタ
 ル者其刑ノ言渡シ
 チ受ケタル時チ云
 フ

○〔第四百四十一
 條刑ノ消滅〕已ニ
 刑ヲ言ヒ渡サレテ
 仕マヒタル後チ又
 ハ無罪放免トナリ
 タル後チ云フ

三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以
 テ其訴ヲ爲ス可シ

四刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬
 第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハ
 ラス何時ヲモ之ヲ爲スヲ得

第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣
 意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證據書類ヲ添ヘ之
 ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大
 審院檢事長ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審
 ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類

○〔第四百四十二條〕再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ第四百二十九條ニ定メタル原由アルヲ趣意書ニ記載シ且其証憑書類ヲ添ヘ之ヲ差出スベシ

○〔第四百四十六條〕死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス

ヲ差出ス可シ

第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出ス可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ訟訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル

可ラス假令之ヲ移スモ刑ノ言渡シヲ受ケタル者既ニ死去シタルヲ以テ更テ公訴私訴ニ付辯論ヲ行ナフヲ能ハサレハナリ

是ヲ以テタ、原ト裁判ヲ取消公訴ニ付テハ復タ審判ヲ行ナハス私訴ニ付テハ其關係人ヨリ民事裁判所ニ出

ル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヲナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訟訴事件ヲ管理スルヲ能ハサル時ハ檢察官其他訟訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スヲ得

大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ

訴スルニ任ス

○〔第四百四十八條特別裁判所〕民事裁判所ヲ自然ノ裁判所ト曰ヘハ特別裁判所トハ刑事及ヒ行政ノ裁判所ヲ云フ

○〔第四百五十一條〕假令ハ早懸ノトキ水ヲ引カン爲メ他ノ堤防ヲ破リ又ハ地界論等ニテ

其訴ヲ爲スヲ得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヲ得

紛争ヲ生シ遂ニ互ニ喧噪ヲ引キ起シ其レガ裁判トナリシニ其裁判所ノ裁判ニ不平ヲ唱ヘ又々一揆スルカ如キ事アリテ衆人ノ心安ンセサル模様アルカ或ハ又如何ナル事變ヲ引キ出サシモ知レサル疑カヒアルキハソレヲ安ンセン爲メ他ノ

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クヲナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヲ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヲ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人

裁判所へ廻ス第四
百五十四條ハ少シ
ク變レル大抵同様
ニ見ルヘシ

○〔第六編第四
百五十九條〕總テ刑
ハ再犯人ノ身体ニ
關セサル者ト雖モ
一旦之ヲ執行シタ
ル時ハ如何トモシ
難キコアリ故ニ裁
判確定スルヲ待テ
始メテ執行スルナ

其裁判ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論
ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス
第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ
爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判所ノ書記局ニ差出
ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達
アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規
則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ア
リタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ

リ

○〔第四百六十條〕
死刑ハ司法卿ノ命
令アルニアラザレ
ハ之ヲ行ナハス人
ノ生命ヲ斷ツニ在
ルヲ以テ濫リニ執
行セザルナリ故ニ
原檢察官ヨリ書類
ヲ司法卿ニ差出シ
其命令ヲ請フ
○〔第四百六十三
條〕死刑ハ刑ノ尤

後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨ
リ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ
三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタ
ル時ハ直チニ之ヲ執行スヘシ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ
大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ
因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書
ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

▲參看○明治十四年十二月司法省丁第二十五號達
治罪法第四百六十二條第二項罰金科料費用及ヒ沒收

モ重大ナル者ナリ
 故ニ其執行ヲ爲ス
 コハ尤モ鄭重ヲ加
 ヘ執行規則ニ定メ
 タル官吏之レニ立
 會フノ外書記モ亦
 之レニ立會ヒ始末
 書ヲ作ルベシ

○〔第四百六十四
 條既決犯罪表〕既
 ニキマリタル罪ノ
 書物

○〔罪名〕斯ノ如キ

物品ノ徵收ハ書記局ニ於テ之レヲ擔當シ會計主任
 引渡ス儀ト可心得此旨相達候事
 破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス
 可シ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書
 ナ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト
 共ニ署名捺印ス可シ
 其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ
 之ヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ關席裁判アリ
 タル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決
 犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於
 テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判
 所ノ書記之ヲ作ル可シ

罪ヲナシタリト云
 フ其罪名

○〔刑名〕斯ノ刑罰
 ニアタリタルト云
 フ其刑名

○〔第四百六十六
 條疑義〕言ヒ渡シ
 ニ疑カフベキ義ア
 ル

○〔第四百六十七
 條〕犯人ノ人違ヒ
 ナルヤ否ヤハ前ニ
 其裁判ニ預リタル

一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地
 二 罪名刑名
 三 再犯
 四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日
 五 對審裁判又ハ關席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司
 法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可
 シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記
 局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條
 件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立
 ナ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ
 之ヲ判決ス可シ

者ニ非レハ之ヲ確定スル能ハズ故ニ原裁判所ニ送致ス然レモ前ニ其事件ニ預リタル者既ニ原裁判所ニ在ラサル時ハ判定シ難キノ恐アリ因テ事實參考ノ爲メ之ヲ呼出スヲ許ス

○(第四百七十條 復權) 重罪ノ刑ニ處セラレ終身公權

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ証人ヲ呼出スヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判官言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復權

ヲ取上ラレ(華士族ハ其族ヲ除ヅカレ勳章年金等ヲ受タル者ハ之ヲ取リ上ゲラル、類ヲ云)タル者主刑(處セラレタル本罪)ハ

期滿免除ノ日ニ消滅スト雖其取リ上ゲラレタル權ハ其消滅シタル日ヨリ五年ヲ經サレハ本々權ヲ得ル事能ハ

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢察事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

- 一 裁判官言渡書ノ謄本
- 二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルヲ證明スル書類
- 三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書
- 四 賠償及ビ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書
- 五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

ス復權ハ即チ本々ノ權ニ返ルヲ云フ
 ○〔第四百七十一條假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免サレタル云々〕刑法註ニ詳シ照シ見ルヘシ
 ○〔第四百七十二條願人ノ品行其他必要〕前々刑ニ處セラレタルノテ更ラニ惡事ヲセザリシカ其他何等ノ事

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所 檢事長ニ差出ス可シ
 第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ
 第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閱シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ
 第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所 檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所 檢事長ニ通知ス可シ
 前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲ス可シ得ス

ニテ是マテ生活セシカト良心ニ立カヘリタル一伍一什
 ○〔第四百七十四條〕復權ノ許否ハ勅裁ニ依ル者ナリト雖モ未タ主刑ノ終リタルヨリ五年ヲ經過セサル等ノ原由アルニヨリ其願ハ允許ス可シトスル時ハ司法卿ノ手限リニテ之ヲ棄却スルヲ得
 ○〔第四百七十五條〕期限ノ半ハ即チ二年半

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ
 第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所 檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所 檢事長ニ送致ス可シ
 檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ
 又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ
 第三章 特赦
 第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヲ得
 監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス

○〔特赦〕犯罪人へ
刑ヲ申シ渡シタル
後其犯罪人良心ニ
立カヘリヨク謹シ
ミテ獄ニアル者ナ
レハ獄則ヲ守リ懲
役ニ服セシ者ナレ
ハヨク勉メ又ハ他
ニスグレテ功アル
時其筋ノ官吏ヨリ
其情狀ヲ申上ケ陛
下ヨリ特別ノ赦罪
ニナルヲ云フ

治罪法註釋終

可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ
特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見
書ヲ添へ上奏ス可シ
第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何
時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スヲ得
死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖トモ刑ノ執行
ヲ停止セス
第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法
卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨
ヲ通知ス可シ
第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ
刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送
致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從
フ

第六十七號

刑法附則別冊ノ通相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス
右奉 勅旨布告候事

明治十四年二月十九日

太政大臣三條實美
司法卿 大木喬任

刑法附則

刑法附則目錄

- 第一章 主刑執行
- 第二章 監視
- 第三章 假出獄及ヒ特別監視
- 第四章 刑事裁判費用
- 第五章 賠償處分

○〔第一條〕死刑ハ
監獄場ニ於テ行ナ
フ者トス○檢察官
ハ檢事長檢事檢事
補等ヲ云ヒ典獄ハ
監獄長ヲ云フ○死
刑ノ言渡シ確定シ
タルキハ檢察官ヨ
リ速ニ訴訟書類ヲ
司法卿ニ呈シ司法
卿ヨリ死刑ヲ執行
ス可キノ命令アリ

刑法附則

第一章 主刑執行

第一條 死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及
ヒ典獄刑場ニ立會典獄ヨリ囚人ニ死刑ヲ執行ス可
キヲ告示シタル後押丁ヲシテ之ヲ決行セシム但
其期限ハ午前十時前トス

第二條 死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴ニシ執行ニ
關スル者ノ外刑場ニ入ルヲ許サス但立會官吏ノ
許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第三條 死刑ノ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作
リ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印シ之ヲ裁判
所ノ檢事局ニ納ム可シ

第四條 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フヲ禁ス

元始祭

タルキハ三日内ニ
執行スル者トス

○〔第二條〕執行ニ
關スル者トハ前條
ノ檢察官書記押丁
等ナリ

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

仁孝天皇祭

神武天皇祭

六月大祓

秋季皇靈祭

神宮神嘗祭

天長節

後桃園天皇祭

新嘗祭

光格天皇祭

十二月大祓

第五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ト申スル者

○〔懷胎〕身モナ女

○〔第六條〕一定ノ
場所トハ死刑ニ處
セラレシ者ヲ埋ム
ルキマリ場所

○〔故舊〕友立

ハ醫師及ヒ穩婆ヲシテ之ヲ検査セシメ果シテ懷胎
ナル時ハ檢察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停
メ産後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ決行
スヘシ

第六條 死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故
舊請フ者アル時ハ典獄之ヲ許可シ下付スルコトヲ得

第七條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマテ何
時ニテモ典獄ノ許可ヲ得テ其新屬故舊ニ接見スル
コトヲ得

第八條 死刑ヲ執行シタル時ハ犯人ノ屬籍氏名年齢
職業住所及ヒ其罪狀刑名ヲ記載シテ左ノ各所ニ榜
示公告ス可シ

刑ヲ宣告シタル裁判所ノ門前
犯罪ノ地

犯人住居ノ地

第九條 徒流ノ囚ヲ發遣スルハ裁判ヲ爲シタル地ノ監獄管理長官ヨリ内務卿ニ上申シ其命令ヲ待テ發船ノ地ニ護送ス可シ

○〔第十條〕獄外ノ役トハ獄舍外ノ地ニ於テ開墾等ニ從事セシムルヲ云フ

第十條 徒刑ノ囚ハ島地ニ於テ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルヲ得

○〔第十二條〕刑法

第十一條 流刑ノ囚幽閉中獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ典獄之ヲ許ス可シ

第二十一條ニ依リ

第十二條 流刑ノ囚幽閉ヲ免ス可キ者アル時ハ典獄ヨリ内務司法兩卿ニ上申シ其許可ヲ受ク可シ

無期流刑ノ囚五年ヲ過タルハ有期流刑ノ囚三年ヲ過タルハ行政ノ處分ヲ

第十三條 徒刑ノ囚假出獄ヲ許サレタル者又ハ流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者家屬ヲ招キ同居スルヲ請フ時ハ之ヲ許スヲ得但其路費ハ自ラ之ヲ辨ス可シ

以テ幽閉ヲ免サン

第十四條 流刑ノ囚幽閉ヲ免シ地ヲ限リ居住セシム

トスルハ内務司

ル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限リ典獄ノ監督ヲ受ケシム

法兩卿ノ許可ヲ得

若シ已ムヲ得サル事故アル時ハ典獄ニ請フテ限

テ之ヲ免シ島地ニ

外ニ出ルヲ得

於テ地ヲ限リテ居

第十五條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者再ヒ罪ヲ

住セシムル者トス

犯シタル時ハ本刑期限内ト雖モ島地ニ於テ直チニ

其刑ヲ執行ス可シ

第十六條 懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ

服セシムルヲ得

○〔第十八條〕定役

第十七條 禁獄輕禁錮ノ囚獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲

○アル囚人服役内

第十八條 服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル

百日以内ノ者ハ工

第十九條 囚人ニ給與スル工錢ノ額ヲ定メ之ヲ交付

錢ヲ給セサル法ナ
 レ本條ハ服役現
 内ニ於テ更ニ罪ヲ
 犯シ定役アル刑ニ
 處セラレタル者モ
 其再犯ノ刑期百日
 以内ナレバ工錢ヲ
 給セザルヲ云フ

○〔第十九條〕明治
 十四年太政官第八
 十一号ノ布告監獄
 則ヲ參看スベシ

〔監視〕監視ハ附加

シ及ヒ領置スル方法ハ監獄ノ規則ニ從フ

第二十條 罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル前
 ニ於テ犯人身死スル時ハ之ヲ徵收セス附加ノ罰金
 ニ於ル亦同シ

第二章 監視

第二十一條 監視ハ主刑ノ終リタル後仍ホ將來ヲ檢
 束スル爲メ警察官吏ヲシテ犯人ノ行狀ヲ監視セシ
 ムル者トス

第二十二條 監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メ
 シメ主刑ノ終リタル時典獄ヨリ犯人ヲ其住居ノ地
 ノ警察所ニ護送シ監視ヲ執行セシム主刑ノ期滿免
 除ヲ得タル者又ハ主刑ヲ免シ止タ監視ニ付スル者
 ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ警察所ニ護送ス可シ

第二十三條 犯人ヲ警察所ニ護送スル時ハ其監視ノ

刑ノ一ニシテ本章
 ハ其規則ナリ

○〔贖本〕書面ノウ
 ツシ

起算滿期ヲ記載シタル文書及ヒ刑名宣告書ノ贖本
 ナ附ス可シ

第二十四條 犯人ノ住居遠地ニ在テ一日程ヲ過シル
 者ハ典獄若クハ檢察官ヨリ先ツ最近ノ警察所ニ護
 送シ其警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致ス可シ

第二十五條 警察所ヨリ犯人ヲ住居ノ地ノ警察所ニ
 送致スル時ハ其里程ヲ計リ日數ヲ限定シテ旅券ヲ
 付與シ犯人到着ノ日直チニ之ヲ其地ノ警察所ニ差
 出サシム但途中事故アリテ淹滞シタル時ハ第三十
 一條ノ例ニ從フ可シ

犯人ヲ送致スル時ハ第二十三條ニ記載シタル書類
 ナ其地ノ警察所ニ遞送ス可シ

第二十六條 犯人住居ノ地ノ警察所ニ於テハ監視ノ
 期限間遵守ス可キ條件ヲ讀聞カセ監視ノ票ヲ下付

○〔第廿六條〕遵守
 スベキ條件トハ第

廿七條以下ヲ云フ
○〔第二十七條〕監
視ノ票トハ其身監
視中ナル事ヲ記セ
シ書付ナリ

ス可シ

第二十七條 監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ
條件ヲ遵守ス可シ
一 毎月二度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルヲ表
シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病
又ハ已ムヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコ
能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ
二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ郡集ノ場所ニ參會スル
コトヲ許サス
三 事故アリテ其住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所
ニ申請シ許可ヲ受ク可シ
四 擅ニ他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許サス若シ已ムコ
トヲ得サル事故アル時ハ其事由ヲ警察所ニ具申シ
許可ヲ受ク可シ

○〔第廿九條〕本條
ハ第二十七條第三
ノ許可アリタル場
合ノ手續キナリ
○〔三十二條〕懲治
場トハ刑法第七十
九條第八十條第八
十二條ニ記載セル
幼者及ビ瘡癩者并
ビニ尊屬親ノ願ニ
依リ放恣不良ノ者
ヲ入ル場所ナリ
○〔歸着〕落付場所

第二十八條 監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ニ因リ其

家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第二十九條 警察所ニ於テ住居ヲ轉スルコトヲ許可シ
タル時ハ其事由ヲ轉住ノ地ノ警察所ニ通知シ第二
十三條ニ記載シタル書類ヲ遞送ス可シ

第三十條 他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許可シタル時ハ
其里程ヲ計リ先方ノ地ニ滞留スル時日ヲ算シ往復
日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與スヘシ

犯人先方ノ地ニ到レハ其地ノ警察所ニ出テ旅券ヲ
示シ官吏ノ認印ヲ受ケ限定ノ日數内ニ歸來リ直チ
ニ旅券ヲ警察所ニ還納ス可シ

第三十一條 旅行中天災又ハ疾病等ニ因リ臨時淹滞
シタル時ハ事由ヲ其地ノ警察所ニ具申シ官吏ノ證
書ヲ受ケ歸着ノ日旅券ニ添ヘ警察所ニ差出ス可シ

○〔第三十四條〕通算トハ前ノ監視期限ト後ノ監視期限ト合セテ其期限満ヲ監視スルヲ云フ

○〔第三十六條〕假リニ監視ヲ免サレタル者ハ第二十七條ノ條件ヲ守ルニ及ハスタ、第三十七條ノ規則ニ從フ

○〔悔改〕心ヲ改メ

第三十二條 監視ニ付スル者住居ナク及ヒ引取人ナキ時ハ其期限間監獄中ノ別房ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ使役ニ供ス住居遠地ニ在テ歸着スル資力ナキ者亦同シ

第三十三條 監獄中ノ別房ニ留置シタル者限内引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸着スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期ノ監視ヲ執行セシム可シ

第三十四條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付ス可キ時又ハ監視ノ期限間再ヒ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付ス可キ時ハ並ニ主刑滿限ノ後前後ノ期限ヲ通算シテ監視ヲ執行ス可シ

第三十五條 罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル者監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入ス可シ

第三十六條 監視ニ付セラレタル者其規則ヲ遵守シ

メル

○〔第三章 仮出獄及特別監視〕重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ守リ善心ニ返リタル有様アレバ流刑ノ外ハ其刑期四分ノ三ヲ過タル後又無期徒刑ハ十五年ヲ過タル後ハ行政ノ處分ヲ以テ假リニ出獄ヲ許ス可シ

悔改ノ狀アル時ハ警察官ヨリ其事實ヲ上申シ内務司法兩卿ノ命ヲ受ケテ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得

第三十七條 假ニ監視ヲ免セラレタル者住居ヲ轉移スル時ハ第二十七條第三及ヒ第二十九條ノ例ニ從フ可シ

第三章 假出獄及ヒ特別監視

第三十八條 假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ典獄ヨリ其犯人ノ行狀及ヒ刑名入獄ノ年月ヲ記載シ假ニ出獄ヲ許サレシコトヲ内務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ

第三十九條 假出獄ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ其證票ヲ犯人ニ下付ス可シ

第四十條 假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一本八屬籍氏名年齢住所罪名刑名及ヒ處刑ノ年月

得ル者ニテ本章ハ
其仮出獄中特別監
視ノ規則ナリ

○〔第四十條〕殘期
トハ譬ヘハ輕懲役
八年ニ處セラレタ
ル者六年間服役シ
タルキハ二年ハ即
チ殘期ナリ○特別
監視ハ第四十一條
ヨリ第四十五條迄
ノ規則ヲ適用スル
者トス○出獄中ノ

日

二殘期何年何月何日間假出獄ヲ許ス事
三假出獄中特別監視ニ付ス可キ事
四假出獄中更ニ重輕罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄
ヲ停止シ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セザル事

第四十一條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自
ラ財産ヲ治メ若クハ職業ヲ營マントスル時ハ警察
所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

第四十二條 假出獄ヲ許ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定
メシメ出獄ノ日典獄ヨリ其證票ノ謄本ヲ添ヘ犯人
チ其住居ノ地ノ警察所ニ護送シ特別監視ヲ執行セ
シム可シ

第四十三條 特別監視ニ付スル者ハ第二十三條第二
十四條第二十五條第二十六條第二十九條第三十一

日數ヲ刑期ニ算入
セザル者トハ仮出
獄中ノ日數ハ刑ノ
期限ニ拘ハラザル
チ云フ

○〔第四十三條〕特
別監視ニ付スル者
ヲ遞送シ且其監視
ヲ執行スル手續等
ハ通常監視ニ同シ

條ノ例ヲ適用ス

第四十四條 特別監視ニ付セラレタル者ハ其期限間
左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一每週間一度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルヲ表
表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病
又ハ己ムヲ得ザル事故アリテ警察所ニ到ルヲ能
ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ

二酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スル
ヲ許サス

三事故アリテ住居ヲ轉移セントスルキハ警察所ニ
申請シ許可ヲ受ク可シ但他ノ府縣ニ轉移スルヲ
ヲ許サス

四往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルヲ許サス

第四十五條 特別監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ニ因

リ其家宅ニ臨檢スルコアル可シ

第四十六條 假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察所ニ還納シ警察所ヨリ證票ヲ出シタル典獄ニ遞送ス可シ

主刑滿限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ス可シ

第四十七條 假出獄ヲ許ス可キ者住居ナク及ヒ引取人ナキ時ハ第三十二條ノ例ニ從ヒ監獄中ノ別房ニ留置ス可シ

第四章 刑事裁判費用

○〔第四十八條〕刑法第四十五條ニ刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止宿料及ヒ第五十一條 第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

人ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ムトアルハ乃チ本條ナリ

第四十九條 日當旅費及ヒ止宿料ノ金額左ノ如シ

日當五十錢

旅費一里十錢

止宿料一宿貳拾五錢

住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ滯在中ハ日當並ニ止宿料ヲ給ス其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ給セス

第五十條 證人ノ日當旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非サレハ之ヲ給與セス

第五十一條 證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第一百九十條ニ從ヒ償金ヲ要求スル時ハ旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給スルコアル可シ

第五十二條 解剖會密等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ給與ス可シ

○〔第五十三條〕裁判費用ハ刑ニ非ルヲ以テ犯人死スルトモ其相續人ニ於テ之ヲ拂ハザルヲ得ズ

○〔第五章賠償處分〕盜マレ物ヲ本主ニ還ス規則又損害ノ償ヲ取ル規則ナリ

○〔轉轉〕又渡シニ他人ノ物トナル

第五十三條 裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徵收ス

第五章 賠償處分

第五十四條 贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スト雖モ若シ轉轉シテ他人ノ手ニ在ル時ハ被害者ノ請求ニ因リ還給セシムル者トス

第五十五條 贓物轉轉シテ他人ノ手ニ在ル時公商ニ由リ買取シタル物品ハ其公商若クハ被害者ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハサレハ直チニ還給セシムルヲ得ス
若シ公商ニ由ラスシテ買取シタル物品ハ其還給ヲ拒ムトヲ得ス但其買取者ハ賣者ニ對シ轉償ヲ求ムルヲ得

○〔公商〕正路ニ取引スル商人ヲ云フ

○〔典主〕質置主

○〔轉償ヲ求ム〕質屋ガ置主ヨリ其金ヲ求ムルナリ

○〔識別〕見ワケ

○〔第五十九條〕犯罪ヨリ現ニ生シタル損害ハトアルハ凡ソ犯罪ニヨリ損害ヲ受ケタリト云フモ單ニ想像ニ止

第五十六條 贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取タル者其贓物現在スル時ハ還給ヲ拒ムトヲ得ス但典物トシテ受取タル者ハ典主ニ對シ轉償ヲ求ムルヲ得

第五十七條 贓物交換シテ現在スル時ハ公商ニ由ルト否トヲ區別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分ス可シ

第五十八條 贓物已ニ費用シタル時又ハ識別ス可カラサル時又ハ其所在ノ知レサル時ハ損害ノ賠償ヲ請求スルヲ得

第五十九條 人ノ名譽若クハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲メ現ニ生シタル損害ハ其賠償ヲ請求スルヲ得但失火ハ此限ニ在ラス

第六十條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判所ニ請求スルヲ得若シ其審判已ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非サレハ之ヲ請求スルヲ

マル者ハ其償ヒテ
求ムルヲ得ズ其
損害ハ直チニ犯罪
ヨリ生シ來リ且ツ
證據分明ノ者ニ非
レハ償ヒテ求ムル
ヲ能ハサルヲ云フ
ナリ

ヲ得ス

第六十一條 刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スヲ得其民事裁判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從フ可シ

第六十二條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルヲ得

第六十三條 贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ所分ヲ請求スルヲ得

刑法治罪法附錄註釋

○〔四十六号〕罪ヲ
犯シタル地ヲ審問
ノ裁判所ト定メタ
レヒ其裁判所ヨリ
頼ミアリタル時ハ
捕縛シタル地ノ裁
判所ヲ以テ審問ノ
裁判所トスルナリ
○〔八十二号〕檢證
證據トナル物品

刑法治罪法附錄註釋

▲明治十四年九月二十日太政官第四十六号布告
書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘヒ當
分ノ内不及其儀候事

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有
之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖ヒ管轄
裁判所ヨリ囑託アリタルヒハ其被告人逮捕ノ地ノ裁
判所之ヲ管轄スベシ〔以下本文ノ參看ニ籍入ス〕

▲明治十四年九月二十日太政官第八十二号布告

第一條 司法官吏ヨリ巡查及び司法警察官治罪法ニ
從ヒ檢證物件差押其他職務ヲ行ナフニ當リ必要ナ
ル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡查又ハ憲
兵卒ヲ使用スルヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊要重要ニ涉ルヒハ直

○〔五十三号〕治罪法第三十二條ニ裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ムトアリ即チ此布告ニヨリ左表ノ如ク位置區劃ヲ定メラレルナリ

チニ鎮台又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルコトヲ得

△明治十四年十月四日太政官第八十六号達

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供スルタノ其院長所長ノ照會ニ應ジ一名又ハ數名ノ巡查爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒トシ公廷ニ入り看護セシムベシ此旨相達候事

△明治十四年十月六日太政官第五十三號布告

各裁判所ノ位置及管轄ノ區畫別表ノ通改正シ明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

裁判所一覽表

大		控訴	始審	治安	府縣	國名	區	郡	名
東		東京		日本橋區	東京府	日本	日本橋區	京橋區ノ内	日本橋區 京橋區ノ内
東京		淺草區	下谷區	京橋區	東京府	日本	下谷區	神田區ノ内 北豊嶋ノ内	淺草區 本所區ノ内 南足立 南葛飾ノ内 北豊島ノ内
芝區		麴町區	四谷區	本郷區	東京府	日本	麴町區	神田區ノ内 牛込區 南豊島ノ内	麴町區 神田區ノ内 牛込區 南豊島ノ内
本郷區		品川	本所區	本郷區	東京府	日本	四ッ谷區	赤坂區 東多摩 南豊島ノ内	四ッ谷區 赤坂區 東多摩 南豊島ノ内
品川		横濱	品川	本郷區	東京府	日本	芝區ノ内 荏原ノ内	麻布區 荏原ノ内 南豊島ノ内	芝區ノ内 麻布區 荏原ノ内 南豊島ノ内
横濱		相模	横濱	本郷區	東京府	日本	本所區ノ内 深川區 南葛飾ノ内	本所區ノ内 深川區 南葛飾ノ内	本所區ノ内 深川區 南葛飾ノ内
相模		武藏	横濱	本郷區	東京府	日本	芝區ノ内 荏原ノ内	本所區ノ内 深川區 南葛飾ノ内	芝區ノ内 荏原ノ内 本所區ノ内 深川區 南葛飾ノ内
武藏		模	横濱	本郷區	東京府	日本	横濱區 久良岐 橘樹 都筑	横濱區 久良岐 橘樹 都筑	横濱區 久良岐 橘樹 都筑
模		三浦	横濱	本郷區	東京府	日本	三浦 鎌倉 高坐	三浦 鎌倉 高坐	三浦 鎌倉 高坐

刑法治罪法附錄註釋

審										
判		裁								
田邊	和歌山	奈良	堺	七尾	富山	金澤				
田邊	和歌山	五條	奈良	輪島	七尾	魚津	富山	高岡	小松	金澤
和歌山縣紀伊	和歌山縣紀伊	大坂府大和	大坂府和泉	石川縣能登	石川縣越中	越中	加賀			
日高(東西)牟婁	和歌山區伊都那賀名草海部有田	宇智吉野葛上忍海高市ノ内葛下ノ内	廣瀬宇陀高市ノ内葛下ノ内	添上山邊平群式上式下十市	丹北丹南八上古市石川綿部	堺區全國四郡大縣安宿志紀ノ内	珠洲鳳至	鹿島羽昨	下新川	上新川婦負射水ノ内磯波ノ内庄川以東
				能美江沼	射水ノ内波ノ内庄川ノ内西		金澤區河北石川			大野

控										
訴		控								
福井	彦根		大津	津山		岡山		洲本	豊岡	姫路
福井	敦賀	彦根	小濱	大津	津山	高梁	岡山	岡山	兵庫	兵庫
福井縣越前	福井縣若狹	滋賀縣近江	滋賀縣若狹	滋賀縣近江	岡山縣美作	岡山縣備中	備前	備中	兵庫縣淡路	兵庫縣但馬
南條今立丹生吉田坂井足羽	敦賀三方	神崎愛知犬上坂田伊香(東西)淺井	遠敷大飯	滋賀野洲甲賀栗太蒲生高島	全國十二郡	上房阿賀哲多川上	小田後月下道窪屋淺口	岡山區全國八郡	加陽宇都	全國二郡
										全國八郡
										多紀水上
										多加加西印南神東神西飾東飾西
										佐用宍粟揖東揖西赤穂

名		所													
名古屋	宇和島	松山			高松		中村	高知	脇町	德島					
一ノ宮	熱田	名古屋	宇和島	大洲	西條	松山	丸龜	高松	中村	高知	脇町	德島			
愛知縣尾張	愛媛縣伊豫	愛媛縣伊豫			愛媛縣讚岐		高知縣土佐	高知縣土佐	德島縣阿波	德島縣阿波					
丹羽葉栗中村	知多愛知ノ内	名古屋區	愛知ノ内	(東西)春日井	海東	海西	喜多西宇和	宇磨新居周布桑村越智	野間久米風早(上下)浮穴和氣伊豫	那珂多度三野豊田鶴足阿野ノ内	大内寒川三木山田香川阿野ノ内小豆	幡多	安藝香美長岡土佐吾川高知	美馬三好麻横阿波	名東名西勝浦那賀海部板野

十

廣		所 判 裁 訴 控 屋 古																																									
尾道	廣島	高山	岐阜			山田	安濃津			岡崎																																	
尾道	三廣	高山	御嵩	大垣	岐阜	山田	上野	四日市	安濃津	豐橋	岡崎																																
廣島縣	廣島縣	岐阜縣	岐阜縣			三重縣	三重縣			愛知縣																																	
備後	備安	安藝	飛彈	美濃	飛濃	美濃	志摩	伊勢	伊賀	伊勢	紀伊	伊勢	三河																														
安那神石	御調甲奴	三上三次	高田	豐田	廣島區	沼田	安藝佐伯	山縣	高宮	加茂	大野	吉城	益田ノ内	加茂可兒	土岐惠那	安八池田	大野	海西(上下)石津	多藝不破	本巢	席田	厚見	羽栗	各務	中島	方縣	山縣	武儀	部上	益田ノ内	桑名員部	朝明	三重	全國四郡	多氣度會	答志英虞	八名(南北)設樂	寶飯	渥美	額田	碧海	幡豆	(東西)加茂

刑法治罪法附録註釋

十一

訴		控					崎			
中	大	福		嚴	福	平				
津	分	岡	原	江	江	平				
豆	中	杵	竹	佐	大	小	久	福	嚴	福
田	野	鏡	田	伯	分	倉	留	岡	原	江
							米			
大	大	福		長	長	長				
分	分	岡		崎	崎	崎				
縣	縣	縣		縣	縣	縣				
豐	豐	豐		筑	筑	對	肥	壹	肥	
後	前	後		前	前	馬	前	岐	前	
				前	前					
玖	下	(東西)國東		直	南海部	大分	企	遠	上	福
珠	毛	速見ノ内		入	北海部	北海部	救	賀	座	岡
日	宇	速見ノ内		大	北海部	北海部	田	鞍	下	區
田	佐	速見ノ内		野	北海部	北海部	川	手	座	席
		速見ノ内		ノ	北海部	北海部	京		須	田
		速見ノ内		内	北海部	北海部	都		御	粕
		速見ノ内		内	北海部	北海部	中		笠	屋
		速見ノ内		内	北海部	北海部	津		志	宗
		速見ノ内		内	北海部	北海部	筑		摩	像
		速見ノ内		内	北海部	北海部	城		那	穗
		速見ノ内		内	北海部	北海部	上		珂	波
		速見ノ内		内	北海部	北海部	毛			早
		速見ノ内		内	北海部	北海部				良
		速見ノ内		内	北海部	北海部				嘉
		速見ノ内		内	北海部	北海部				麻

長	所 判 裁 訴 控 島											
佐	長	西	鳥	米	濱	松	山					
賀	崎	鄉	取	子	田	江	口					
佐	島	長	西	鳥	米	濱	今	松	萩	赤	岩	山
賀	原	崎	鄉	取	子	田	市	江	間	間	國	口
長	長	島	鳥	鳥	鳥	島	山					
崎	崎	根	取	取	根	根	口					
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣					
肥	肥	隱	因	伯	石	出	長	周	長	周	周	
前	前	岐	幡	耆	見	雲	門	防	門	防	防	
藤	基	南	長	全	全	神	大	赤	熊	都	美	
津	肆	高	崎	國	國	門	津	間	毛	濃	彌	
	養	來	區	八	六	出	阿	關	大	佐	佐	
	父	來	北	郡	郡	雲	武	區	島	波	波	
	三	來	高	全	全	樞	見	厚	大	吉	吉	
	根	來	來	國	國	縫	島	挾	島	敷	敷	
	神	來	來	六	六	飯		豐	玖			
	崎	來	來	郡	郡	石		浦	珂			
	佐	來	來	全	全							
	賀	來	來	國	國							
	小	來	來	六	六							
	城	來	來	郡	郡							
	杵	來	來	全	全							
	島	來	來	國	國							

院													
所 判 裁 訴 控 館 函					所 判								
八	弘	函			大	秋	磐						
戸	前	館			曲	田	井						
八	五所河原	青	弘	壽	福	江	函	大	能	本	秋	磐	
戸	青森縣陸奥	森	前	都	山	刺	館	曲	代	庄	田	井	
青	森	開拓使			秋	田	岩手縣						
森	縣	陸奥			陸	羽	陸	羽	羽	陸	陸	陸	
縣	陸奥	後志			後	後	後	後	後	後	前	中	
陸奥	與	島牧壽部歌棄磯谷			島	志	振	島	後	中	後	中	
與	三戸上北ノ内	(西中南)津輕			松浦	久遠太櫓瀬棚	山越	函館區龜田上磯芽部	仙北平鹿雄勝	鹿角	山本北秋田	川邊南秋田	(東西)磐井肝澤江刺
		東津輕											氣仙
		北津輕											由利

○(司十八号)輪轉
代
ハ
ン

▲明治十四年十月八日太政官第五十九号布告
治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告
人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ
限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クベシ此旨
布告候事

▲明治十四年十月二十日司法省丁第十八号達
書記局其他訟廷等ノ心得書別紙ノ通相達候事

書記局其他訟廷等ノ掌務心得書

第一條 書記局諸般ノ事務ハ各員輪轉之ヲ執リ豫メ
其主掌ヲ定メス

第二條 訟廷ノ取締被告人扣所ノ看守ハ巡查獄卒等
ヲシテ之ヲ掌ラシムヘシ

第三條 訴訟口誥ハ雇員ヲ以テ之ニ充テ訴訟人呼入
其他訟廷ニ關スル雜事ノ使用ハ小使ヲ以テ之ニ充

門候
モン

ツヘン

第四條 門候ヲ置クト否トハ其廳ノ便宜ニ任ス若シ之ヲ置クトキハ雇員又ハ小使ヲ以テ之ヲ掌ラシムヘシ

但東京各裁判所ハ此限ニ在ラス

第五條 宿直ハ等外吏雇員等ニテ之ヲ務メシメ在宅當番(退廳後ヲ云フ)ハ判任官ニテ順次之ヲ務メシムヘシ

但東京裁判所ハ此限ニ非ス

▲明治十四年十一月十五日司法省丁第二十一號達
法律上判事檢事書記等署名捺印ヲ要スル節相用フヘキ印章ハ左ノ雛形ニ照シ各自彫刻シ費用ハ官費支拂ニ相立候儀ト可心得此旨相達候事

○(司二十一号)篆楷
テン書
カイ書

○(司七号)治罪法
第三百十五條ニ據ルニ裁判書ノ謄本ハ當然下附セラレヘキ者ニ非ラスシテ只訴訟關係人ノ請求ニヨリテ下附セラレ、ナリ而テ其之ヲ下附スルハ公益ノ爲ニ非ラス

官
氏
名

勅任方九分 曲尺
奏任方七分 全
判任方六分 全

書記ハ「裁判所書記某」ト刻ス字体ハ篆楷適宜タルヘシ但認メ易キヲ要ス

▲明治十四年十二月二日司法省甲第七号布達

治罪法第三百十五條 裁判言渡ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費用ヲ上納スル儀ト可心得此旨布達候事

▲明治十四年十二月二日司法省甲第八号布達

大審院諸裁判所々屬代言人規則別紙ノ通相定候條此旨布達候事

所属代言人規則

シテ獨リ諸求者ノ
利益ノ爲メニスル
者ナルヲ以テ其費
用ハ之ヲ諸求者ヨ
リ徵收スルナリ
騰本ウシツ
ホシ

○(司十五号)明治

第一條 治罪法中所屬代言人ト稱スルハ大審院及ヒ
各裁判所所在ノ地ニ住居スル免許代言人ヲ云
第二條 裁判官ノ職權ヲ以テ選任シタル代言人辯護
人ハ正當ノ事由ヲ證明スルコアラサレハ之ヲ辭ス
ルコヲ得ス
第三條 代言又ハ辯護受任中代言免許滿期ニ至リ引
續營業セズ又ハ廢業スト雖モ該事件終結ニ至ルマ
テ其代言辯護ヲ擔當スヘシ
第四條 代言又ハ辯護受任中ハ他ノ訴訟事件ヲ以テ
其任ヲ闕クコヲ得ス
第五條 裁判官ノ職權ヲ以テ代言人辯護人ヲ選任シ
タル場合ニ於テモ其謝金ハ被告人之ヲ擔當スヘシ
總テ謝金ニ付テハ出訴スルコヲ許サス
▲明治十四年十二月五日司法省丙第十五号達

十四年九月二十日
太政官第八十二号
達ニヨレハ司法官
吏ヨリ巡查及ヒ兵
員ヲ要求使用スル
ニハ警察署又ハ憲
兵屯營ニ照會シテ
云々トアレトモ豫
審判事檢事檢證及
ヒ物件差押ノ事件
ニ付急速ヲ要シ警
察署ニ照會ヲ爲ス
ノ違アラサルモハ
直チニ巡查ヲ同行
シ又ハ其場所ニ居
ル巡查ヲ見當リ次
第使用シテモ苦シ

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢事檢證及ヒ物件差押ノ
事件ニ付急速ヲ要スル場合直ニ巡查ヲ同行シ又ハ所
在ノ巡查ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ可達置此旨
相達候事
▲明治十四年十二月五日司法省丙第十六号達
治罪法中犯人證人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從
來ノ慣例ニ依リ捺印爲致候儀ト心得ヘシ此旨相達候
事
▲明治十四年十二月五日司法省丁第廿六號達
使丁規則別冊之通相定候條明治十五年一月一日ヨリ
施行スヘシ此旨相達候事
使丁規則
第一條 各裁判所書記局ハ刑事民事ニ關スル召喚狀
其他書類ヲ送達セシムル爲メ其請負人ヲ定メ之ヲ

カラサルコト云フナリ

○〔司十六号〕治罪法ニ從ヒ押印ヲ爲スルハ實印ヲ押スヘキコト勿論ナレトモ實印無之者ニ限リ押印ヲ以テ實印ニ代用セシムルナリ

○〔司二十六号〕使丁コツカヒ

使丁取締トス使丁取締ハ一人トス但場所ニ因リ二人以上ヲ命スルコトアル可シ

第二條 使丁ハ使丁取締之ヲ撰ヒ其氏名ヲ書記局ニ届出鑑札ヲ受ルモノトス使丁ノ人員ハ使丁取締適宜之ヲ定メ書記局ノ許可ヲ受ク可シ

第三條 使丁取締ハ送達ノ事ニ付總テ其責ニ任スルモノトス

第四條 使丁取締ハ常ニ裁判所ニ在テ送達ノ事ヲ取扱フ可シ

第五條 使丁ハ送達ヲ爲ス時裁判所ノ鑑札ヲ帶行ス可シ

第六條 送達ヲ爲スニハ其法律規則ニ從フ可シ

第七條 使丁取締及ヒ使丁ハ訴訟ニ付代人トナリテ訟庭ニ出ルコトヲ許サス

第八條 送達ノ事ニ關シ他人ニ損害ヲ被ラシメタル

キハ使丁取締其償ヲ擔當スヘシ但使丁ノ過失懈怠ニ由ルキハ使丁取締ハ之ニ對シ更ニ其償ヲ求ムルコトヲ得

第九條 送達賃錢ハ書類ノ大小ニ拘ハラヌ一通ニ付一里五錢以下トス賃錢ノ定限ハ使丁取締之ヲ申立書記局之ヲ決シ且送達書ニ其賃錢高ヲ附記スヘシ

第十條 賃錢ノ定限ハ其取扱所ニ貼示シ三日以上新聞紙ニ掲載シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ公告ス可シ

第十一條 刑事ニ付テノ送達賃錢ハ其送達ヲ受ルモノヨリ之ヲ拂置ク可シ但左ノ場合ニ於テハ書記局ヨリ之ヲ拂置ク可シ

一 檢察官又ハ裁判官ヨリ呼出ス證人鑑定人通事ノ呼出狀

二檢察官ノ控訴申立ヲ被告人ヘノ通知及ヒ呼出狀
三檢察官ヨリ被告人ヘ送達スル上告申立書及趣意書

第十二條 刑事附帶ノ私訴及ヒ民事ニ付テノ送達賃
錢ハ總テ其送達ヲ請求スル者ヨリ之ヲ拂フ可シ

第十三條 送達賃錢ニ付テノ訴訟ハ其書類ヲ發シタ
裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

第十四條 使丁取締ハ書類送達ヲ正實ニ取扱フ可キ
旨ノ書面ヲ書記局ニ差出ス可シ

第十五條 使丁取締及ヒ使丁此規則ニ違背シタルキ
裁判所書記局ハ使丁取締ニ左ノ條件中ニテ相當ノ
言渡ヲ爲スヘシ

一貳十圓以下ノ違約金ヲ納メシムル事
二解職セシムル事

○治罪法第二十二

條ニ在ル處ノ書記
局所屬ノ使丁ナル
者ハ此規則ニ依テ
之ヲ命シ且職務ヲ
取扱ハシムルナリ

三事情重キ者ハ違約金ヲ納メ解職セシムル事

第十六條 使丁取締タルニハ其裁判所々在地ニ家屋
ヲ有シ滿二十一歳以上ノ者コシテ書記局ノ試験ヲ
經ルヲ要ス使丁取締タルニハ身元保証トシテ金
五十圓以上ノ價格アル公債証書地券又ハ銀行其他
官許アル株券証書ヲ書記局ニ納ムヘシ但此保証金
ハ解職ノ時下戻ス可シ

第十七條 試験ハ書記二名以上ニテ之ヲ爲ス可シ但
書記不足ナルキハ雇ヲ以テ之ニ充ツヘシ

試験ノ科目ハ左ノ如シ

一使丁規則

二請負郡村ノ地名又ハ里數

三普通書簡ノ書讀

第十八條 實決ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ身代限ノ

處分ヲ受ケ未ク辨償ヲ終ラサル者ハ使丁取締又ハ使丁タルヲ許サス

▲明治十四年十二月九日司法省丁第廿七號達

本年第五十四號公布ニ依リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クキハ其管轄輕罪裁判所ノ名稱ヲ用ヒ其印ヲ捺シ某治安裁判所ニ於テスルヲ附記スヘシ左ニ雛形相添ヘ此旨相達候事

書式雛形

於八王子治安裁判所

橫濱輕罪裁判所

印章雛形

橫濱輕罪
裁判所

明治十四年十二月十五日

右奉 勅旨布告候事

太政大臣

農商務卿

司法卿

▲明治十四年十二月十五日太政官第六十五号布告

商船内犯罪取扱規則別紙ノ通制定ス

商船内犯罪取扱規則

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルヲ

チ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ

船長ニ告訴告發ヲ爲スヲ得

第二條 船長告訴告發ヲ受ケタルトキ又ハ重罪輕罪

ノ現行犯アルヲ知リタルトキハ其事件ニ付假ニ

訊問檢証ノ處分ヲ爲シ且証憑及ヒ事實參考ト爲ヘ

○〔六十五号〕船舶内ニ於テ犯罪アルトキ疾ク其處置ヲ行ハサレハ犯人逃走証据湮滅ノ恐アリ而シテ政府ニ屬スル船舶即チ鑑ニ於テハ海軍律ヲ以テ之ヲ處スヘキヲ論ヲ待タス商船内ノ犯罪ニ於テハ船長ニ豫審判事ニ屬ス

ル職務ノ一部ヲ行
フヲ許シ假ニ訊
問檢証等ノ處分ヲ
爲サシメ着港ノ節
被告人ト共ニ檢事
又ハ司法警察官ニ
引渡サシムルナリ
若外國ノ港ニ着シ
タルトキハ其在留
ノ日本領事ニ引渡
スヘキ者トス

キ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルヲ能
ハサルトキハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ
爲スヘシ前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アル
ヲ要ス

第三條 船長ハ証憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ
取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事
又ハ司法警察官ニ引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ着
シタルトキハ其地駐劄ノ領事ニ之ヲ引渡スヘシ

明治十四年十二月十二日司法省丁第廿八号達
治罪法中ニ掲ケタル送達書呼出召喚狀勾引狀勾留狀
收監狀及宣誓書式別紙ノ通相定候條右ニ照準ス可シ
此旨相達候事

送 達 書

一送達スヘキ書名		壹冊	
一同		壹通	
右使丁ヲ以テ何府縣下何町又ハ何國何郡何 村何番地何某ヘ送達セシムル者也			
明治 年 月	裁判所 日 何之印	送達シタ ル月日時	受取人ノ署名 捺印若シ能ハ サル時ハ其事 由
裁判所		送達シタ ル場所	親屬雇人若ク ハ戸長ヘ書類 ヲ渡シタル時 ハ其事由
書記氏名		右致送達候也	
		使丁氏名印	

割印

同上略之

早チ中斷シテ一筆ヲ受取人ニ渡シ
一葉ヲ書計局ヘ送納ス可シ

呼出狀

此呼出狀ハ出頭ノ節
書記局ニ差出ス可シ

住所身分職業

氏名

右云々ノ事件ニ付証人トシテ相尋ル儀有之
來ル何月日時何所ニ出頭可致者也

但同日時出頭セサルニ於テハ罰金ヲ言渡
シ且勾引狀ヲ發スルコアル可シ

明治年月

裁判所
日
何之印

何裁判所

豫審判事氏名印
書記氏名印

右之通取扱候也

明治年月日

使丁氏名印

受取人ノ署名捺印若シ能ハ
サル時ハ其事
送達シタル月
日時
送達シタル場
所
親屬雇人若シ
ハ戸長ニ渡シ
タル時ハ其事
由

召喚狀

住所身分職業

氏名

右云々ノ事件ニ付訊問ノ筋有之何月日時當
裁判所ニ出頭可致者也

明治年月日

何裁判
所時
之印

何裁判所

豫審判事氏名印
書記名氏印

右之通取扱候也

明治年月日

使丁氏名印

受取人ノ署名捺印若シ能ハ
サル時ハ其事
送達シタル月
日時
送達シタル場
所
親屬雇人若シ
ハ戸長ニ渡シ
タル時ハ其事
由

割印

同上略之

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人ニ渡シ
一葉ヲ書記局ニ還納スヘシ

(檢事之印) 勾 引 狀

住所身分職業

氏 名

(若シ氏名分明ナラサルトキハ容貌体格等)

右云々ノ事件ニ付訊問ノ筋有之當裁判所へ勾引ス可キ者也

但本人潜匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

明治 年 月 日

何裁判所之印

何裁判所

豫審判事氏名印

書記氏名印

割印 同上略之

(檢事官印) 勾 留 狀

住所身分職業

氏 名

(若シ氏名分明ナラサルトキハ容貌体格等)

右云々ノ事件ニ付治罪法第二百二十六條ノ規則ニ從ヒ 監倉へ勾留ス可キ者也

但本人潜匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

明治 年 月 日

何裁判所之印

何裁判所

豫審判事氏名印

書記氏名印

割印 同上略之

勾引シタル被 告人ノ署名捺 印若シ能ハサ ル時ハ其事由	執行シタル月 日時	執行シタル場 所	執行ノ手續 被告人ニ正本ヲ示シ贖本 ヲ下附ス	家宅搜索ヲ爲 シタル時ハ其 事由	勾引スルコト能 ハサル時ハ其 事由	右ノ通取扱候也 明治 年 月 日 巡查又ハ憲兵氏名印
--------------------------------------	--------------	-------------	------------------------------	------------------------	-------------------------	----------------------------------

勾留シタル被 告人ノ署名捺 印若シ能ハサ ル時ハ其事由	執行シタル月 日時	執行シタル場 所	執行ノ手續 被告人ニ正本ヲ示シ贖本 ヲ下附ス	家宅搜索ヲ爲 シタル時ハ其 事由	勾留スルコト能 ハサル時ハ其 事由	右之通取扱候也 明治 年 月 日 巡查又ハ憲兵氏名印
--------------------------------------	--------------	-------------	------------------------------	------------------------	-------------------------	----------------------------------

(檢事官印) 收 監 狀

住所身分職業

○未遂犯付減等○未丁年ニ 氏 名
付減等○自首ニ付減等○再犯ニ付加重

(若氏名分明ナラサルト)
キハ容貌体格等

右云々ノ事件ニ付取調ヲ爲シタル處本罪刑
法第 條ニ該ル可キ者ト思料ス依テ檢事ノ
意見ヲ聽キ 監倉ニ收監ス可キ者也
但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

明治 年 月 日

何裁判
所之印

何裁判所

豫審判事氏名印
書記氏名印

収監シタル後 告人ノ署名捺 印若シ能ハサ ル時ハ其事由	執行シタル月 日時	執行シタル場 所	執行ノ手續 被告人ニ正本ヲ示シ謄本 ヲ下附ス	家宅搜索ヲ爲 シタル時ハ其 由	收監スルヲ能 ハサル時ハ其 事由	右之通取扱候也 明治 年 月 日時 巡查又ハ憲兵氏名印
--------------------------------------	--------------	-------------	------------------------------	-----------------------	------------------------	-----------------------------------

割印 同上畧之

宣 誓 書

何々ノ事件ニ付愛憎畏懼ノ心
ナク總テ正實ニ陳述ス可キヲ
誓フ

明治 年 月 日

通事
証人 氏名印
鑑定人

○(司三十号)治罪
法第二百十五條ニ
ヨリ裁判書ノ謄本
又ハ拔書ヲ求ムル
者無資力ニシテ費
用ヲ上納スルヲ能
ハサル者ニカキリ
費用ヲ徴收セス

▲明治十四年十二月十四日司法省丁第三十号達
裁判所印章ノ儀來明治十五年一月一日以後左ノ通改
定候條各廳ニ於テ調製シ印鑑ヲ以テ可届出此旨相達
候事

方 曲 一 尺 五 分

何々
控訴
裁判所

控訴
始審
治安
輕罪
違警

裁判所各一顆ヲ
彫刻ス

テ下附スルコニテ
即チ明治十四年十
二月甲第七号布達
ノ例外ナリ

○〔七十一号〕明治
十四年九月二十日
第四十六号布告ニ
ヨリ治安裁判所ニ
於テ輕罪裁判所ヲ
開クキハ其檢察官
ノ職務ハ其他ノ警
部ヲシテ執行ハシ
ムルナリ

△明治十四年十二月十五日司法省丁第三十一号達
本年(本月)甲第七號布達裁判所言渡ノ賸本又ハ拔書ヲ
求ムル者代價ノ儀無資力ニシテ上納スル能ハサル者
ニ限リ無代價ニテ下渡スモ不苦儀ト可心得此旨相達
候事

△明治十四年十二月廿八日太政官第七拾壹号布告
治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其
處在地ノ警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム
右奉勅旨布告候事

△明治十四年十二月廿八日太政官第七十三號布告
治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事
擔當人ト稱スル者ハ左ノ通
無能力者
一未丁年者

○〔七十二号〕治罪

法第十二條第九十
八條第百十二條ニ
無能力者及ヒ法律
ニ定メタル代人ト
云フ者アリ又治罪
法第十四條以下ニ
民事擔當人ト云フ
語所々ニ散見セリ
此布告ハ即チ無能
力者法律ニ定メタ
ル代人民事擔當人
ノ何タルヲ解釋シ

二妻タル者

三白痴瘋癲

四治産ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

一未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人

二夫タル者

三白痴瘋癲人ノ保管者

四治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

一未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督

ヲ爲ス者

二夫タル者

三白痴瘋癲人ノ保管者

四雇主

タル者ナリ
 (無能力者) 滿二十
 歳以下ノ未丁年者
 ハ自ラ財産ヲ治ル
 ノ能力ナキ者トス
 又丁年ト雖モ人ノ
 妻タル婦人ハ萬事
 夫ノ管理ニ從フヘ
 キ者ナレハ夫ノ指
 揮ヲ待タズシテ自
 ラ財産ヲ治ルノ權
 利ナシトス又白痴
 瘋癲人及ヒ刑法ニ
 ヨリ治産ノ禁ヲ受
 ケタル者ハ自ラ財
 産ヲ治ルコト能ハ
 サルハ固ヨリ論ヲ
 待タサルナリ是等
 ノ者ヲ治罪法ニ於
 テ無能力者ト稱シ
 左ニ掲ケタル法律
 ニ定メタル代人
 テ財産ヲ治ル者ト
 スルナリ
 (代人) 未丁年者ハ

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ者
 ▲明治十四年十二月廿八日太政官第七十六號布告
 本年十月第五十三號布告裁判所名稱區劃表始審ノ行
 中相川豐岡洲本田邊脇町高山西郷平戸福江嚴原天草
 大曲八戸ノ名稱ヲ削除シ其管轄ハ相川ヲ新瀉ニ豐岡
 ヲ姫路ニ洲本ヲ神戸ニ田邊ヲ和歌山ニ脇町ヲ德島ニ
 高山ヲ岐阜ニ西郷ヲ松江ニ平戸福江嚴原ヲ長崎ニ天
 草ヲ熊本ニ大曲ヲ秋田ニ八戸ヲ弘前ニ合併ス
 右奉 勅旨布告候事
 明治十四年第五十三號布告中裁判所ノ位置區劃
 ノ改正ナリ
 ▲明治十四年十二月廿八日太政官第七拾四號布告
 治罪法中刑事ノ控訴ニ關スル條件ハ當分ノ内實施セ

父若クハ母又ハ親
 屬ノ後見人タル者
 又親屬ナラサルモ
 後見人タル者代テ
 其財産ヲ管理スル
 人ノ妻タル者白痴
 瘋癲人治産ノ禁ヲ
 受ケタル者ハ夫保
 管者財産管理人代
 テ其財産ヲ支配ス
 是等ノ者ハ本人ヨ
 リ代人ノ委任ヲ受
 ケタルニ非ラズシ
 テ法律ニヨリ代人
 タルノ事ヲ執リ行
 フ者ナレハ之ヲ法
 律ニ定メタル代人
 ト稱スルナリ
 (擔當人) 民事擔當
 人トハ犯罪人ノ所
 爲ニ付テ其責ニ任
 シ被害者ニ對シ犯
 人ノ所爲ヨリ生シ
 タル損失ヲ償フヘ
 キノ義務アル者ナ

右奉 勅旨布告候事
 ▲明治十四年十二月廿八日太政官第七拾七號布告
 本年十月第五十四號ヲ以テ輕罪ニシテ豫審ヲ要セサ
 ルモノニ限リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クヲ
 得ヘキ旨布告候處當分ノ内相川豐岡洲本田邊脇町高
 山西郷平戸福江嚴原天草大島大曲八戸ノ各治安裁判
 所ニ於テハ輕罪裁判所ヲ開キ總テノ輕罪ヲ裁判スル
 コトヲ得ヘシ
 但シ本文ノ場合ニ於テ訟庭内治罪ノ手續等ハ本年
 第五十四號布告但書ノ通りタルヘシ
 右奉 勅旨布告候事
 ▲明治十四年十二月廿八日太政官第七十九號布告
 各裁判所ノ位置及管轄區畫ノ儀本年十月第五十三號
 ヲ以テ布告候處北海道(函館始審裁判所管内ヲ除ク)并

リ即チ未丁年者ノ
 父若クハ母又ハ未
 丁年者ト同居シテ
 監督ヲ爲ス親屬夫
 白痴癡癩ノ保管者
 及ヒ雇主ナリ但シ
 雇主ハ雇人ガ其雇
 主ノ命ヲ受テ行フ
 タル事件ニ就テ人
 ニ損害ヲ加ヘタル
 事ノミ其責ニ任ス
 ルナリ

○〔七十四号〕當分
 ノ内刑事控訴ニ關
 スル規則ハ之ヲ實
 施セス由テ刑事ニ
 付テハ一切控訴ヲ
 爲スコトヲ許サ、ル
 ナリ

○〔七拾七号〕本文
 ニ掲ケタル地ノ治
 安裁判所ニ於テハ
 當分ノ内輕罪裁判
 所ヲ開キ豫審ヲ要
 スル輕罪ト雖モ之

ニ沖繩縣ノ儀ハ當分從前ノ通其所轄ニ於テ裁判シ治
 罪ノ手續モ便宜ノ取計ヲ爲スヘシ但控訴ノ儀北海道ハ
 函館控訴裁判所沖繩縣ハ長崎控訴裁判所管轄ニ屬ス
 右奉 勅旨布告候事

▲明治十四年十二月廿八日太政官第八拾號布告
 本年九月第四十八號布告左ノ通改正ス
 違警罪ノ儀ハ本年第三十六號布告ニ據リ明治十五年
 一月一日ヨリ治安裁判所ニ於テ裁判スヘキ處當分ノ
 内府縣警察署及ヒ其分署ニ於テ裁判セシムヘシ
 右奉 勅旨布告候事

▲明治十四年十二月廿八日太政官第八十二號布告
 大審院各裁判所ニ於テ明治十四年十二月三十一日以
 前審理ニ着手セシ刑事ハ十五年一月一日以後ト雖モ
 治罪法ニ拘ラス仍ホ從前ノ規則ニ從ヒ處分スヘシ

ヲ審判スルコトヲ
 得ルナリ又其訟庭
 内審判ノ手續ハ第
 五十四号布告但書
 ノ通便宜ノ取計ヲ
 爲シ且上訴ヲ許サ
 、ルナリ

○〔七十九号〕第五
 十三号布告ノ例外
 ナリ

○〔八十号〕第三十
 六号布告ニ據レハ
 三府五港ヲ除クト
 アレトモ今此布告
 ナリテ改正シ違警
 罪ハ當分ノ内總テ
 府縣警察署ニ於テ
 之ヲ裁判スルコト
 爲シタルナリ然レ
 トモ是唯刑事ニ止
 リ刑事附帶ノ民事
 即チ私訴ハ警察署
 ニ於テ裁判スルノ
 權ナキニヨリ通常
 ノ民事裁判所ニ出

右奉 勅旨布告候事

▲明治十四年十二月廿八日司法省第二號
 本年十月第五十三號布告ヲ以テ各裁判所ノ位置及ヒ
 管轄ノ區畫改正候ニ付テハ從前布告布達中上等裁判
 所トアルハ控訴裁判所地方裁判所トアルハ始審裁判
 所區裁判所トアルハ治安裁判所ト改マリ候儀ト心得
 ヘシ

右布達候事

▲明治十四年十二月廿八日太政官第八十一号布告
 刑法第三條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルニ左ニ從
 フヘシ

第一條 新舊法比照スルニハ左ノ如シ

新法	舊法
一死刑	斬絞

訴スヘシ
 〔八十二号〕治罪法
 第五條ハ公訴私訴
 ノ裁判ハ管轄裁判
 所ニ於テ現ニ施行
 フル法律ニ定メタ
 ル訴訟手續ニ從ヒ
 之ヲ爲スヘシ同第
 廿七條ニ此法律ニ
 定メタル豫審又ハ
 公判ニ付テノ規則
 ニ頒布以前ニ係ル
 犯罪ニモ亦之ヲ適
 用ストアレトモ明
 治十四年十二月卅
 一日以前審理ニ着
 手セシ事件ハ從前
 ノ治罪規則ニ從ヒ
 處分スヘシト云フ
 コテ即チ治罪法第
 五條第廿七條ノ一
 部分ヲ變更シタル
 布告ナリ○茲ニ明
 治十四年十二月三
 十一日以前審理ニ

- | | |
|-------|---------------------|
| 二無期徒刑 | 役終身 |
| 三有期徒刑 | 禁獄終身 |
| 四無期流刑 | |
| 五有期徒刑 | 懲役十年 |
| 六重懲役 | 懲役七年 |
| 七輕懲役 | 禁獄十年 |
| 八重禁獄 | 禁獄七年 |
| 九輕禁獄 | 懲役十一日以上五年以下 |
| 十重禁錮 | 禁獄鎖錮十一日以上五年以下 |
| 十一輕禁錮 | 贖罪収贖罰金科料二圓以上 |
| 十二罰金 | 懲役禁獄鎖錮拘留十日以下 |
| 十三拘留 | 贖罪収贖罰金科料二圓未滿 |
| 十四科料 | |
| 第二條 | 舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期內ニ在ル時ハ新 |

着手セシ刑事ハト
 アルニ依レハ明治
 十四年十二月三十
 一日以前已ニ檢察
 官ヨリ起訴アリタ
 ル者ニ限リ此法ヲ
 適用スヘシ同日以
 前已ニ警察官又ハ
 檢事ノ搜查ニ係ル
 ト雖トモ未タ豫審
 又ハ公判ノ起訴ア
 ラサリシ者ハ治罪
 法ニ從フヘキヲ知
 ルヘキナリ
 ○〔新舊法比照〕刑
 法第三條第二項ニ
 所犯新法前ニ在テ
 新法實施後ニ裁判
 ナ爲スヘキ者ハ新
 舊ノ法ヲ比照シ輕
 ニ從テ處断スヘキ
 旨ヲ定メタルトモ
 舊法ノ刑ト新法ノ
 刑トハ大ニ相異ナ
 ルヲ以テ之ヲ比照

法ニ從フ但シ舊法ノ刑期ニ過シル事ヲ得ス〔舊法ニ
 於テ懲役百日ニ該ル者新法ニ從ヒ二月以上百日以
 下ノ重禁錮ニ處スルノ類〕若シ舊法ノ刑期新法主刑
 ノ短期ニ等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役ア
 ル時ハ舊法ニ從フ〔舊法ニ於テ禁獄三十日ニ該ル者
 新法ニ照シ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ
 舊法ニ從ヒ禁獄三十日ニ處スルノ類〕
 第三條 舊法新法ノ刑共ニ短期長期アル者ハ其短期
 ノ短キ者ニ從フ但シ其長期ノ短キ者ニ過ル事ヲ得
 ス〔舊法ニ於テ一年以上三年以下ノ懲役ニ該ル者新
 法ニ照ラシ三月以上四年以下ノ重禁錮ニ該ルキハ
 新法ニ從ヒ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處スルノ
 類〕若シ舊法新法ノ刑其短期等シクシテ舊法ニ定役
 ナク新法ニ定アル時ハ舊法ニ從カフ〔舊法ニ於テ二

スルノ容易ナラス
由テ左表ノ如ク比
較ノ定例ヲ示シタ
ルナリ
○〔第一條〕舊法ノ
刑期ハ長期ト短期
ト二期アリ故ニ舊
法ノ刑期新法ノ刑
期ニ在ル者ハ新法
ニ從フ然レモ舊法
ノ刑期若シ新法ノ
短期ト同一ニシテ
舊法ニ定役ナル者ハ
舊法ニ從フナリ
○〔第二條〕舊法新
法共ニ長期ト短期
トアル者ハ其最モ
短キ方ニ從フト雖
モ其長期ノ短キ者
ニ過クルヲ得ス
若シ兩法トモ長期短
期相均キ時ハ定役

月以上三年以下ノ禁獄ニ該ル者新法ニ照ラシ二月
以上二年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ二月
以上二年以下ノ禁獄ニ處スルノ類〕
第四條 舊法ノ贖罪收贖若クハ罰金科料ノ金額新法
主刑ノ金額内ニ在ル時ハ新法ニ從フ但シ舊法ノ金
額ニ過クル事ヲ得ス
第五條 舊法新法ノ罰金科料共ニ多數寡數アル者ハ
其寡數ノ寡キ者ニ從フ但シ其多數ノ寡キ者ニ過ク
ル事ヲ得ス
第六條 舊法ニ於テ單ニ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰
金ヲ附加ス可キ時ハ其罰金ヲ附加セス
第七條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金科
料ニ該ルトキハ新法ニ從フ舊法ニ於テ贖罪收贖若
クハ罰金科料ニ該ル者新法ニ照シ體刑ニ該ル時ハ

ナキ者ニ從フ
○〔第四條〕本條モ
亦第二條ト同一ノ
法意ナリ
○〔第五條〕本條ハ
第三條ト同一ノ法
意ナリ
○〔第六條〕體刑ト
ハ禁獄懲役等ノ如
ク直チニ其身體ヲ
拘束スル刑ヲ云フ
ナリ
○〔第八條〕罰金科
料ヲ納完セサル者
ハ一圓ヲ一日ニ折
算シテ禁錮又ハ拘
留ニ處スルヲハ刑
法第二十七條第三
十條ニ定メタリ由
テ舊法ニ從ヒ贖罪
收贖ニ處シタル者
ト雖モ納完スルヲ
能ハサル者ハ禁錮
又ハ拘留ニ換ルヲ
云フナリ

舊法ニ從フ
第八條 舊法ニ從ヒ贖罪收贖ニ處シタル者其金額ヲ
延期限内ニ納完スル能ハサル時ハ一圓ヲ一日ニ折
算シ輕禁錮又ハ拘留ニ換フ但シ一圓未滿ト雖モ仍
ホ一日ニ折算ス
第九條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ重罪ノ
刑ニ處スル時ハ新法ノ附加刑ヲ適用セス但シ除族
追奪位記沒收ノ類ハ舊法ニ從フ
第十條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ禁錮ノ
刑ニ處スル時ハ監視ヲ附加セス
第十一條 華士族ノ犯罪新法ニ於テ輕罪ニ該ル者舊
法ニ從ヒ處斷スル時ハ其族ヲ除セス
第十二條 新法ト舊法トヲ比照スルニハ各其本法ニ
照シ加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

○〔第九條〕舊法時
代ノ犯罪ニ新法ニ
從ヒ重罪ニ處スル
時ハ新法ノ附加刑
ノ適用ヲスルコト
シ但除族退奪位記
沒收ハ舊法ニ從テ
處分スルナリ

○〔第十條〕舊法時
代ノ刑ヲ新法ニ從
ヒ禁錮ノ刑ニ處ス
ル時ハ監視ヲ附加
スルコトナシ

○〔第十一條〕舊法
ニ於テ華士族ノ犯
罪破廉耻甚ニ該ル
者ハ除族ニ處属ス
レトモ新法ニ於テ
輕罪ニ該ル者ニシ
テ舊法ニ從ヒ處斷
スル時ハ除族セズ

○〔第十二條〕舊新
ノ刑ヲ比照スルニ
ハ雙方共法律ニ從
ヒ加重減輕シタル

第十三條 舊法ニ於テ棒鎖ニ該ル者ハ仍ホ棒鎖ニ處ス

右 勅旨ヲ奉シ布告候事

△明治十四年十二月廿八日太政官第七十八號布告

重罪裁判所管轄區劃別紙ノ通相定メ明治十五年一月

一日ヨリ之ヲ施行ス但治罪法第七十二條ニ從ヒ管内

便宜ノ裁判所ニ於テ一ヶ處又ハ數ヶ所開廳スヘシ

右奉 勅旨布告候事

重罪裁判所管轄

東京重罪裁判所管轄

東京始審裁判所管轄ノ地方

神奈川重罪裁判所管轄

橫濱始審裁判所管轄ノ地方

新潟重罪裁判所管轄

新潟 高田 長岡 新發田始審裁判所管轄ノ地方

埼玉重罪裁判所管轄

浦和 熊谷始審裁判所管轄ノ地方

千葉重罪裁判所管轄

千葉 木更津始審裁判所管轄ノ地方

椽木重罪裁判所管轄

椽木 宇都宮始審裁判所管轄ノ地方

群馬重罪裁判所管轄

前橋始審裁判所管轄ノ地方

茨城重罪裁判所管轄

水戸 土浦始審裁判所管轄ノ地方

山梨重罪裁判所管轄

甲府始審裁判所管轄ノ地方

静岡重罪裁判所管轄

者ヲ本刑ト爲シテ
比照スルナリ

○〔第十三條〕舊法
ニハ棒鎖ノ刑ナシ
故ニ舊法ニ於テ棒
鎖ニ該ル者ハ乃チ
棒鎖ニ處スルナリ

靜岡 濱松始審裁判所管轄ノ地方
 長野重罪裁判所管轄
 松本 長野 上田始審裁判所管轄ノ地方
 大坂重罪裁判所管轄
 大坂 堺 奈良始審裁判所管轄ノ地方
 京都重罪裁判所管轄
 園部 宮津始審裁判所管轄ノ地方
 兵庫重罪裁判所管轄
 神戸 姫路始審裁判所管轄ノ地方
 和歌山重罪裁判所管轄
 和歌山始審裁判所管轄ノ地方
 滋賀重罪裁判所管轄
 大津 彦根始審裁判所管轄ノ地方
 德島重罪裁判所管轄

德島始審裁判所管轄ノ地方
 岡山重罪裁判所管轄
 岡山 津山始審裁判所管轄ノ地方
 福井重罪裁判所管轄
 福井始審裁判所管轄ノ地方
 石川重罪裁判所管轄
 金澤 富山 七尾始審裁判所管轄ノ地方
 高知重罪裁判所管轄
 高知 中村始審裁判所管轄ノ地方
 愛媛重罪裁判所管轄
 松山 高山 宇和嶋始審裁判所管轄ノ地方
 長崎重罪裁判所管轄
 長崎 佐賀始審裁判所管轄ノ地方
 福岡重罪裁判所管轄

福岡始審裁判所管轄ノ地方
 熊本重罪裁判所管轄
 熊本始審裁判所管轄ノ地方
 大分重罪裁判所管轄
 大分 中津始審裁判所管轄ノ地方
 鹿兒島重罪裁判所管轄
 鹿兒島 宮崎始審裁判所管轄ノ地方
 函館重罪裁判所管轄
 函館始審裁判所管轄ノ地方 開拓使 札幌 根室 地方
 青森重罪裁判所管轄
 弘前始審裁判所管轄ノ地方
 愛知重罪裁判所管轄
 名古屋 岡崎始審裁判所管轄ノ地方
 岐阜重罪裁判所管轄

三重 安濃津 山田始審裁判所管轄ノ地方
 宮城重罪裁判所管轄
 仙臺始審裁判所管轄ノ地方
 福島重罪裁判所管轄
 福島 若松 平 白川始審裁判所管轄ノ地方
 磐手重罪裁判所管轄
 盛岡 磐井始審裁判所管轄ノ地方
 山形重罪裁判所管轄
 山形 米澤 酒田始審裁判所管轄ノ地方
 秋田重罪裁判所管轄
 秋田始審裁判所管轄ノ地方
 廣島重罪裁判所管轄
 廣島 尾道始審裁判所管轄ノ地方
 山口重罪裁判所管轄